

河川の安全利用

- 安全な川の活動に向けて -

No More 水難事故 2020

2020 年 8 月現在
2003-2019 年収集データ
全 3,018 件を対象

川の中や水際などの陸域における
水難事故を防止するための対策



河川財団の 水難事故防止に関する研究

河川財団は、「河川に関する調査・研究」及び「環境整備」並びに「河川への理解を深めるための活動」に対する助成並びにその実施を行うことにより、「国土の利用、整備又は保全」及び「国民の心身の健全な発達」を促進し、公共の福祉を増進することを目的として活動しています。

河川への理解を深めるための体験活動の実施には、
安全に関する知識及び技能が不可欠です。

そのために水難事故防止に向けた情報や知見を整理し、
安全確保に役立つ情報の提供等を行っています。

1 水難事故全体の概況

警察庁統計

厚生労働省統計

2 水難事故の 5W

When • Where • Who • What • Why

河川財団調査

3 リスクへの対策例

How

1

水難事故全体の概況

警察庁統計

厚生労働省統計

1 年間の水難死亡事故の 1/3 は河川・湖沼池で発生

警察庁によると2019年の水難発生件数は1,298件で死者・行方不明者は695人です。

警察庁統計

そのうち、河川・湖沼池に限ると、死者・行方不明者は248人(35.7%)となります。 ※河川のみは225人(32.3%)

令和元年における水難の概況
(2019 年)

		海	川	湖沼池	用水路	プール	その他
1,298 件	1 年間の発生件数 (水難事故全体)	●	●	●	●	●	●
695 人 (内、子ども 30 人)	1 年間の死者・ 行方不明者 (水難事故全体)	●	●	●	●	●	●
248 人 (内、子ども 17 人)	1 年間の死者・ 行方不明者 (河川・湖沼池)		●	●			

子どもの水難死亡事故の 約 6 割は「川」と「湖」

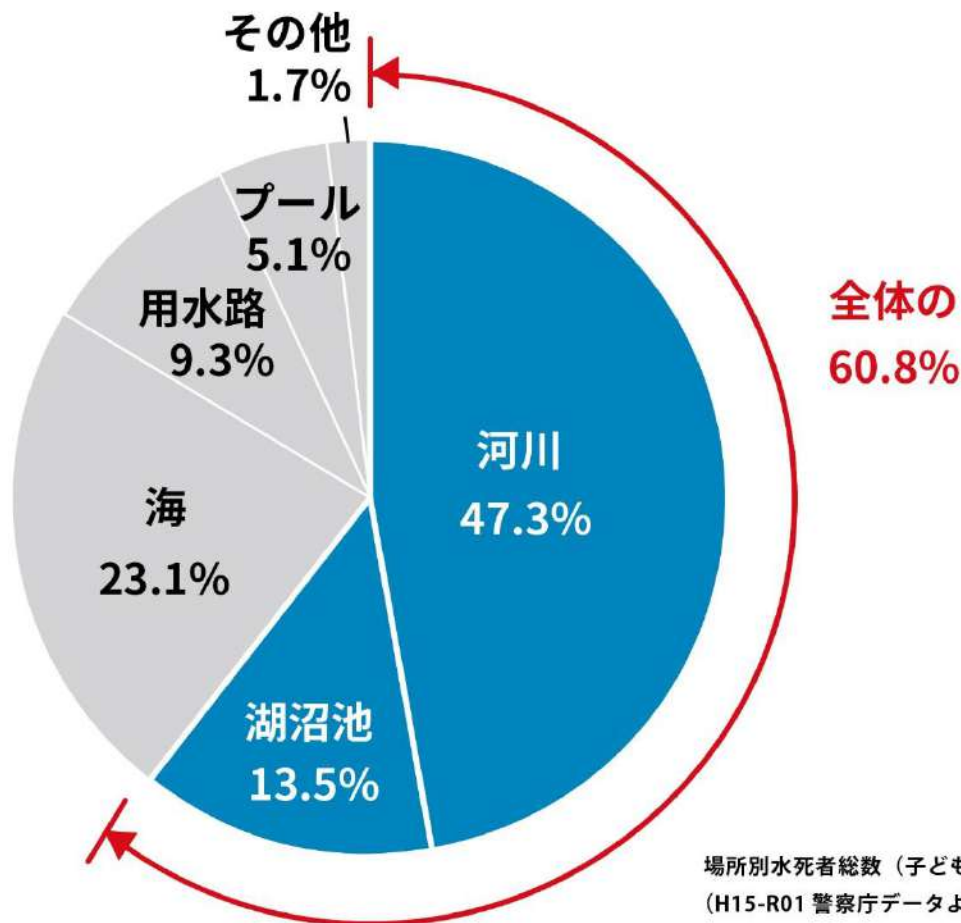
場所別死者・行方不明者数（子ども）
（2003 年 -2019 年）

2003-2019年の間の場所別の死者・行方不明者数（中学生以下の「子ども」）によると約6割は河川や湖沼等で亡くなっています。

これは海で亡くなった人数の2倍以上です。

川などはそれだけ子どもにとって身近であるとともに不慮の事故に遭いやすい場所と言えます。

警察庁統計



子どもの不慮の事故死 「交通事故」に続く上位が 「溺死（屋外）」

(2010年 - 2014年)

3歳から14歳までの多くの年齢における「不慮の事故」の死因のうち、「交通事故」に次いで多いのが「溺死（屋外）：海・川・池等の自然の水域」。

厚生労働省「人口動態調査」の調査票情報（平成22年から平成26年までの5年間）によると、5年間で溺死（屋外）は189件発生し、夏期の発生が多いことがわかります。

厚生労働省統計

	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位
0歳	窒息(就寝時) 32%	窒息(胃内容物の誤嚥) 23%	窒息(詳細不明) 11%	窒息(食物の誤嚥) 10%	交通事故 6%
1歳	交通事故 28%	溺水(浴槽内) 23%	窒息(胃内容物の誤嚥) 9%	窒息(食物の誤嚥) 8%	窒息(その他の物による誤嚥) 5%
2歳	交通事故 43%	窒息(胃内容物の誤嚥) 8%	溺水(その他原因) 7%	窒息(食物の誤嚥) 6%	窒息(詳細不明) 4%
3歳	交通事故 37%	建物からの転落 16%	溺死(屋外) 9%	溺水(浴槽内) 7%	窒息(食物の誤嚥) 5%
4歳	交通事故 36%	建物からの転落 13%	溺水(浴槽内) 8%	溺水(その他原因) 8%	溺死(屋外) 8%
5歳	交通事故 47%	溺死(屋外) 14%	溺水(浴槽内) 7%	溺水(その他原因) 5%	建物からの転落 3%
6歳	交通事故 50%	溺死(屋外) 19%	溺水(その他原因) 6%	溺水(浴槽内) 4%	建物からの転落 4%
7歳	交通事故 59%	溺死(屋外) 20%	溺水(その他原因) 6%	建物からの転落 3%	その他の転落 2%
8歳	交通事故 57%	溺死(屋外) 17%	溺水(その他原因) 5%	窒息(食物の誤嚥) 4%	建物からの転落 4%
9歳	交通事故 45%	溺死(屋外) 17%	建物からの転落 7%	溺水(その他原因) 7%	不慮の首つり・絞首 5%
10歳	交通事故 52%	溺水(浴槽内) 11%	溺死(屋外) 9%	窒息(食物の誤嚥) 5%	不慮の首つり・絞首 4%
11歳	交通事故 37%	溺死(屋外) 21%	建物からの転落 8%	溺水(浴槽内) 7%	溺水(その他原因) 5%
12歳	交通事故 46%	溺死(屋外) 16%	溺水(浴槽内) 13%	窒息(詳細不明) 7%	窒息(胃内容物の誤嚥) 3%
13歳	交通事故 44%	溺死(屋外) 17%	溺水(浴槽内) 13%	建物からの転落 7%	窒息(食物の誤嚥) 3%
14歳	交通事故 39%	溺死(屋外) 19%	溺水(浴槽内) 12%	建物からの転落 10%	溺死(詳細不明) 4%

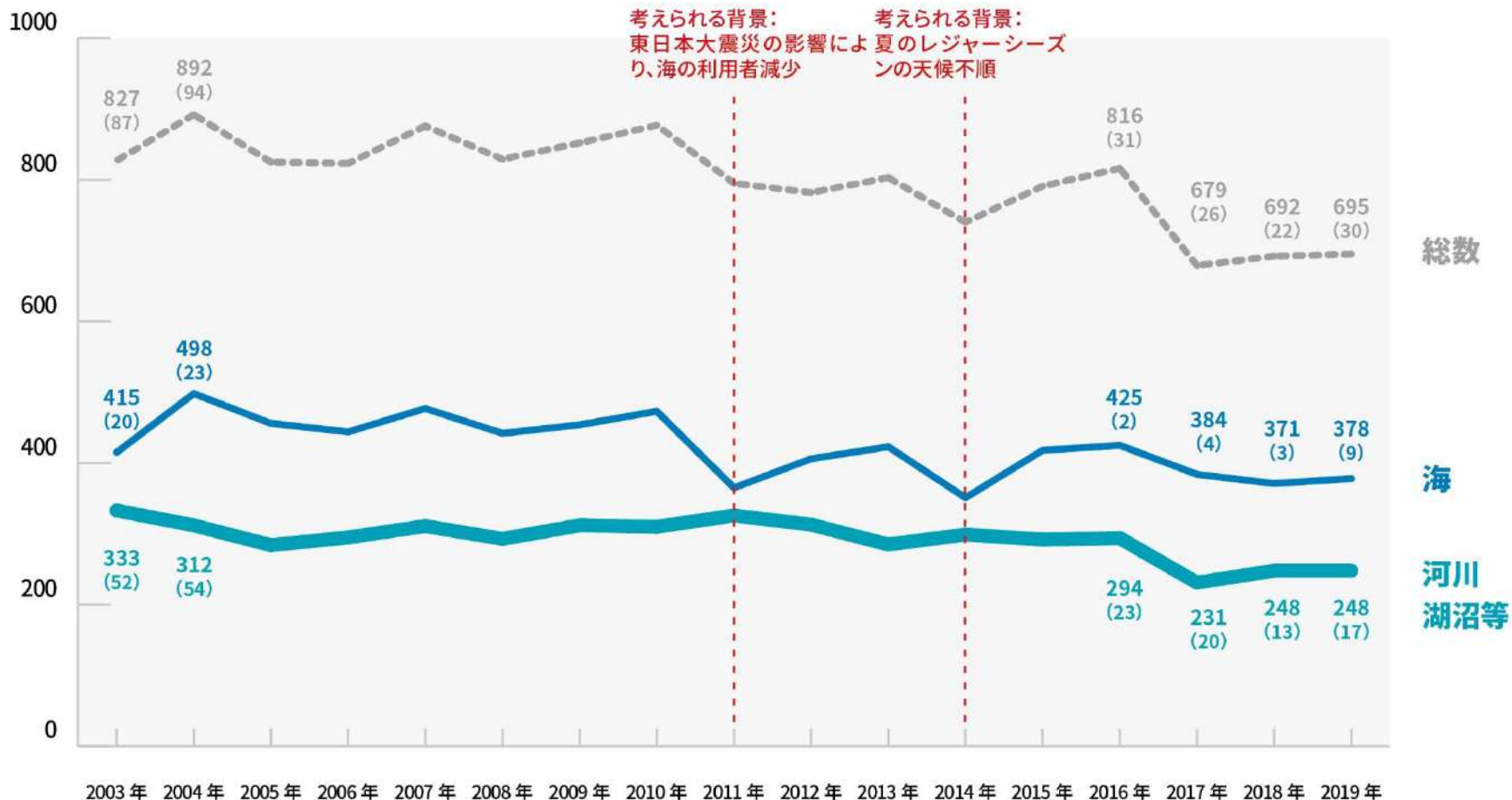
【出典】消費者庁が、厚生労働省「人口動態調査」調査票（平成22年～26年の5年間分・事故発生時の状況等の詳細情報を含む）を入手・分析したデータ

河川等における死者・ 行方不明者数は 概ね横ばいで推移

場所別死者・行方不明者数の推移をみると、水難事故全体では、年により増減があります。
ただし、河川・湖沼池における水死者・行方不明者数は概ね横ばいです。
交通事故は技術の進歩等により年々減っていますが、河川等においてはこの10年程変わっておりません。毎年同じような事故が繰り返し起こっているという課題があります。

警察庁統計

場所別死者・行方不明者数
(2003年 - 2019年)



場所別死者・行方不明者数 (H15-R01 警察庁データより河川財団作成) カッコ内の数字は子どもの数

警察庁資料は、全国の 水難事故統計情報を掲載

警察庁による水難事故の統計資料は、警察庁生活安全局生活安全企画課が全国の都道府県警察からの報告をとりまとめたものとして公表されています。

警察庁統計

令和〇〇年〇月〇〇日

令和〇〇年における水難の概況

警察庁生活安全局生活安全企画課

警察庁公表資料のイメージ

・毎年6月頃に前年分の概況を公表（10ページ程度）

・各警察署の事故調書等に基づく各都道府県警察の集計値を警察庁がとりまとめたもの

・海やプールなどで発生した事故を含めた「海や水の事故」全般を扱っており、河川で発生した水難事故だけを対象としたものではない

・統計資料としてまとめられており、事故原因などの詳細は公表されていない。

【主な掲載表等】

- 表1 概要
- 表2 都道府県別水難発生状況
- 表3 水難者の年齢層別数
- 表4 死者・行方不明者の年齢層別数
- 表5 死者・行方不明者の場所別数
- 表6 死者・行方不明者（子供）の場所別数
- 表7 死者・行方不明者の行為別数
- 表8 死者・行方不明者（子供）の行為別数

河川財団では、報道された水難事故データを収集・整理し、独自に分析

(2003年 - 2019年)

河川財団では、報道された水難事故事例を対象として、発生状況や事故パターンごとに整理するとともに、原因把握や解析によって得られた知見に基づいて、具体的な事故防止対策を検討し、水難事故を防止するために有効な基礎情報・基礎資料として取りまとめを行っています。

河川財団調査

注意点

収集データの情報元

TV

新聞

ネット

目的

- ・川や湖沼で発生した水難事故を対象に、事故発生時の状況や行動などの事故情報を整理する
- ・どのような状況下で事故が発生しているかを定量的に把握する
- ・事故の発生状況などに基づいて事故を類型化し、定性的な解析を行う

報道された水難事故に限定

河川財団で収集した事例は新聞社や放送局等の報道機関各社によって報道された水難事故に限られています。

そのため、事故事例は発生したすべての水難事故を網羅したものではありません。



警察庁統計と河川財団調査数の単純比較※

2019年(R01)の死者・行方不明者 ※海・プールを除く

※データを精微に突合せたものではない。

警察庁統計

311人

死者・行方不明者の場所別数から海・プールを除外した数

河川財団調査

179人

被災程度別の水難者数から死亡・行方不明のみを抽出

2

水難事故の 5W

When ・ Where ・ Who ・ What ・ Why

河川財団調査

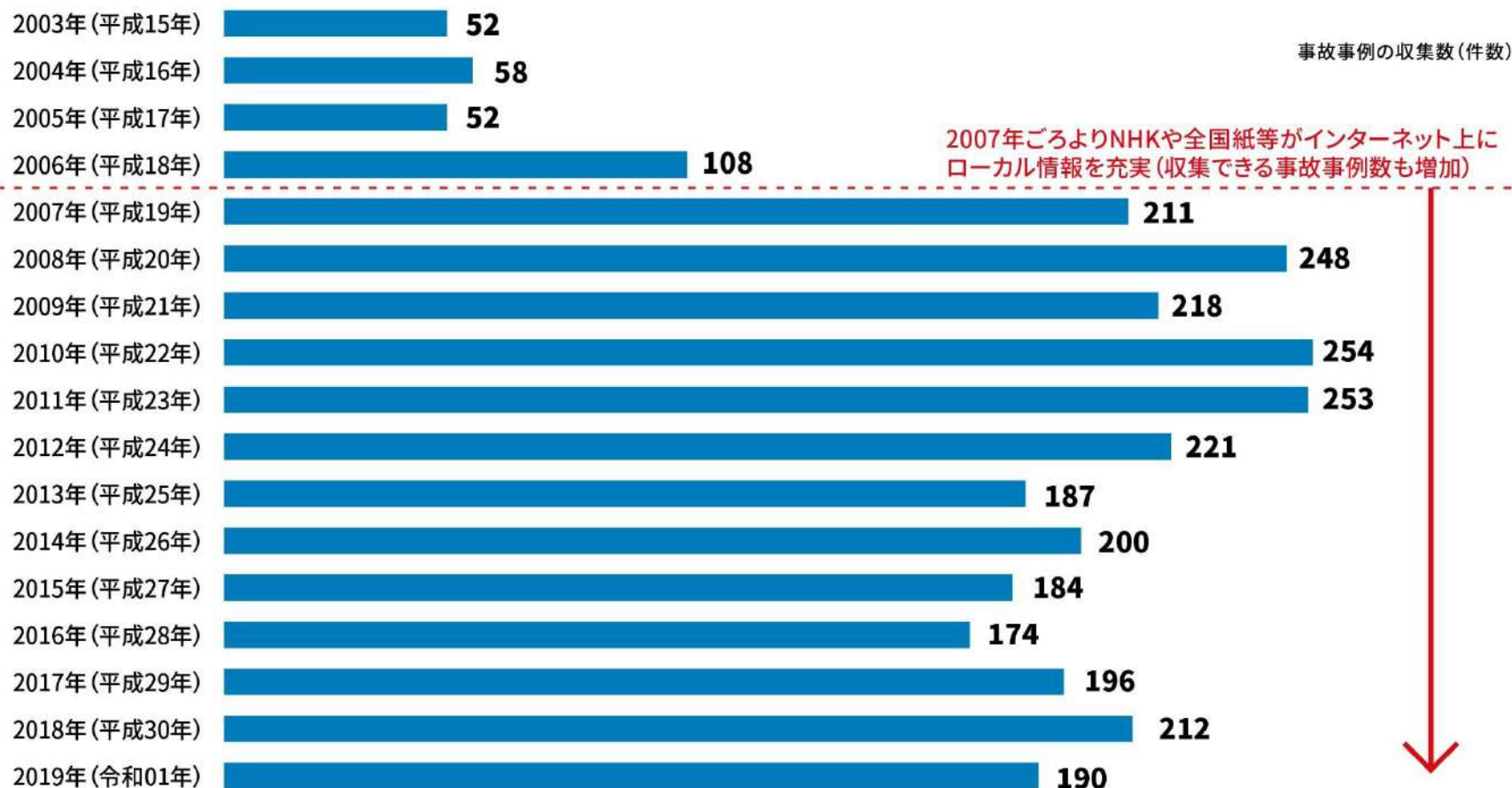
河川財団の 水難事故事例収集数は、 17年間で3,018件

(2003年-2019年、人数：4,580人)

一般的に新聞やテレビ等で報道される水難事故は、人的被害をともなう重大事故に限られることが多いため、河川財団では全ての水難事故を収集しているわけではありません。(報道されない事故は収集できないため)

当初水難事故の大半は全国紙の地方版、地方紙、テレビのローカルニュース枠で小さく扱われることが多かったため、軽微な事故や地方で発生した事故は、事故の発生そのものや事故の詳細を把握しにくい条件下にありました。

河川財団調査



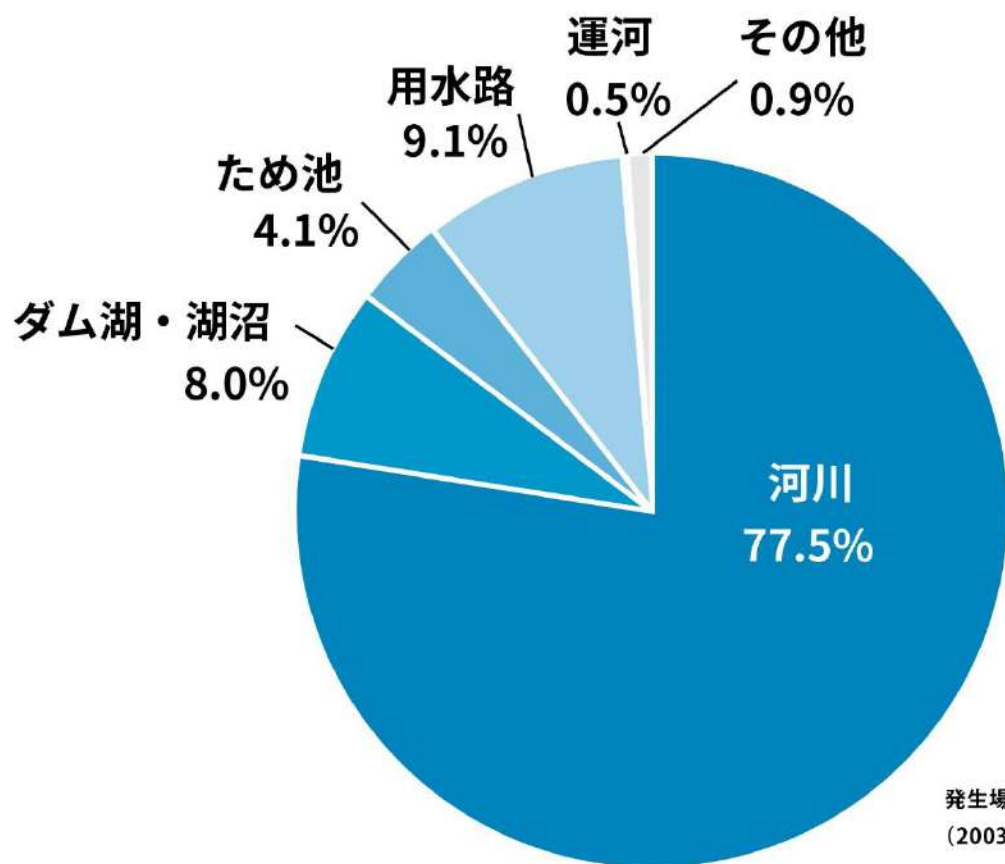
河川財団収集データは 河川・ダム湖・湖沼等 に特化

下記グラフは、警察庁統計のようにどのような場所で水難事故が多いかを示したのではなく、本調査で収集した事故事例に限定して、発生場所ごとに区分して整理したものです。

河川財団が収集した事例は、河川が約8割を占めています。
海やプール等の事例は含めておりません。

河川財団調査

発生場所別の事故発生状況
(2003年 - 2019年)



発生場所別の事故発生状況
(2003-2019年)【n=3,018 (件数)】

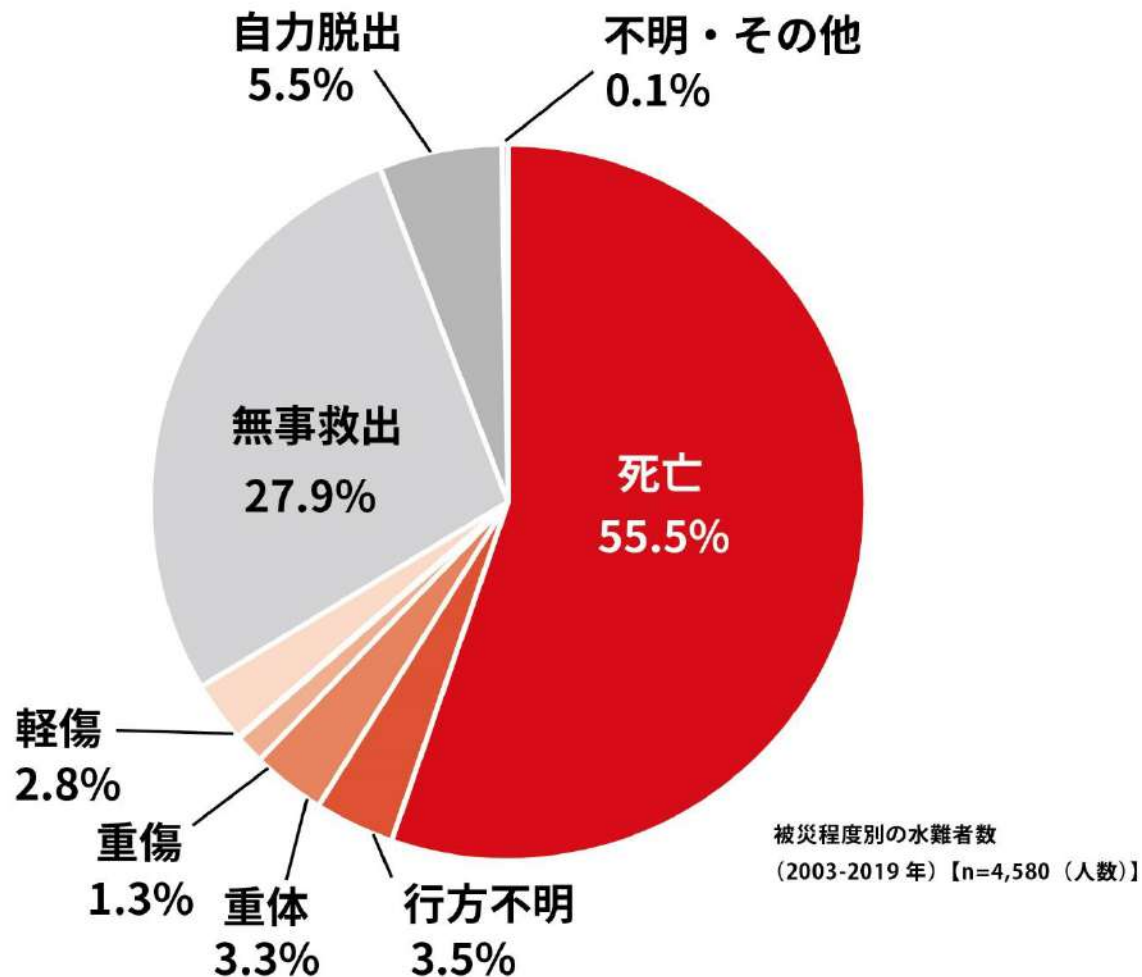
収集した水難者総数 4,580 人の約 6 割は 「死亡・行方不明」

被災程度別の被災者数
(2003 年 -2019 年)

一般的に、報道記事では、軽微な事故は報道されにくい傾向にあります。本調査では事例を報道記事に求めている関係で、死亡事故や行方不明者の割合が高くなっていると推察されます。

ただし、水難事故が発生すると、死亡や重体などの重大な結果を招くケースがかなりあり、事故を未然に防止することの重要性が伺えます。

河川財団調査



水難事故の 5W

When

月別 及び 時間帯

いつ
When

どこで
Where

だれが
Who

何をして・なぜ
What・Why

水難事故件数の 約半数は 7-8 月に集中

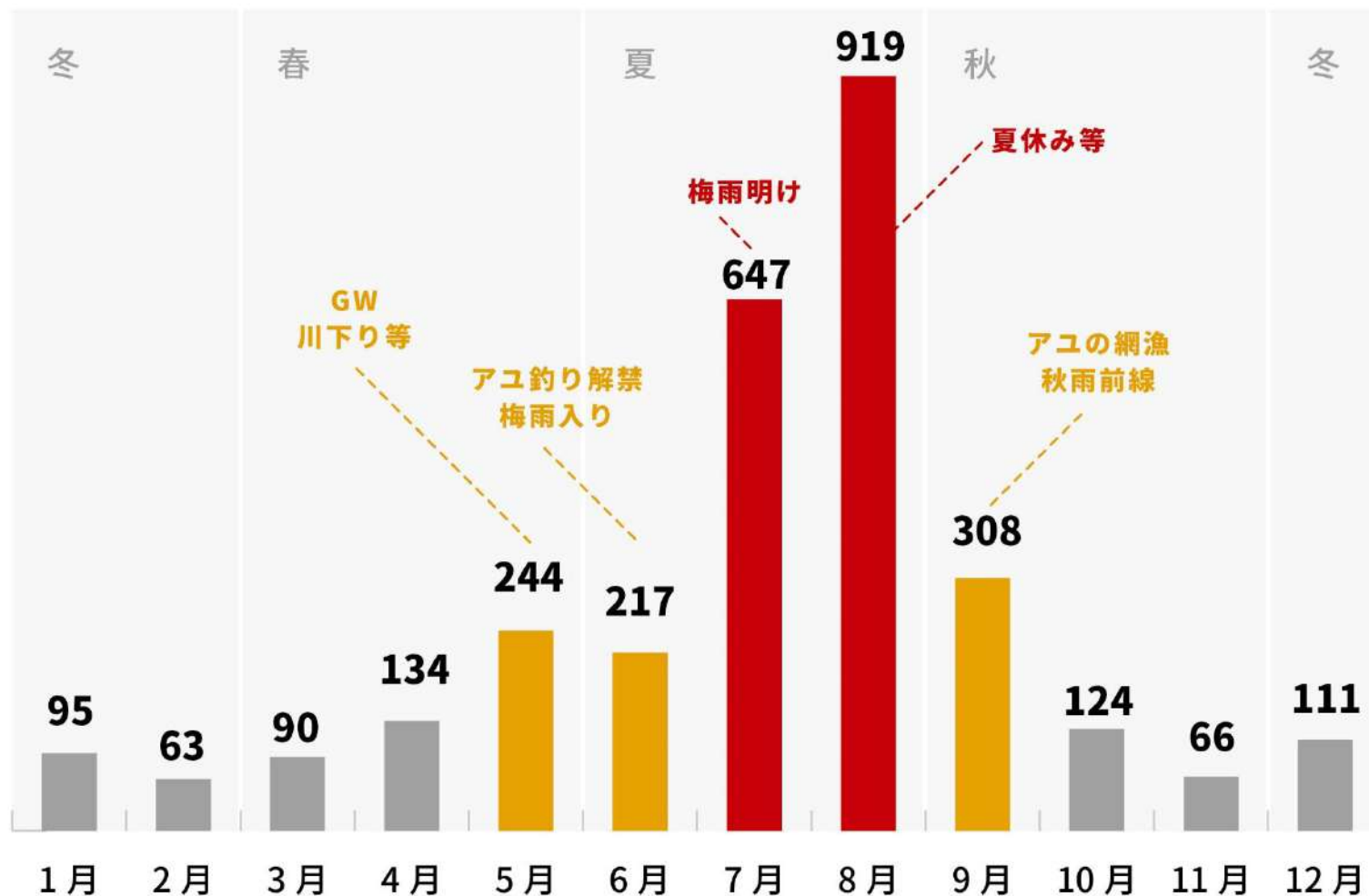
月別の事故発生状況
(2003 年 -2019 年)

水難事故は、7-8月の2か月程度の限られた期間に、年間事故件数の約50-60%が集中して発生しています。
夏期に事故が多発するのは、夏休みやレジャー等で河川利用の機会が増えるからです。

また、5月はGW等でカヌー等の川下りの事故、6月と9月はアユ釣りや悪天候による増水等の事故が見受けられます。

河川財団調査

月別の事故発生状況
(2003-2019 年) [n=3,018 (件数)]



水難事故の発生件数は 午後の時間帯に集中

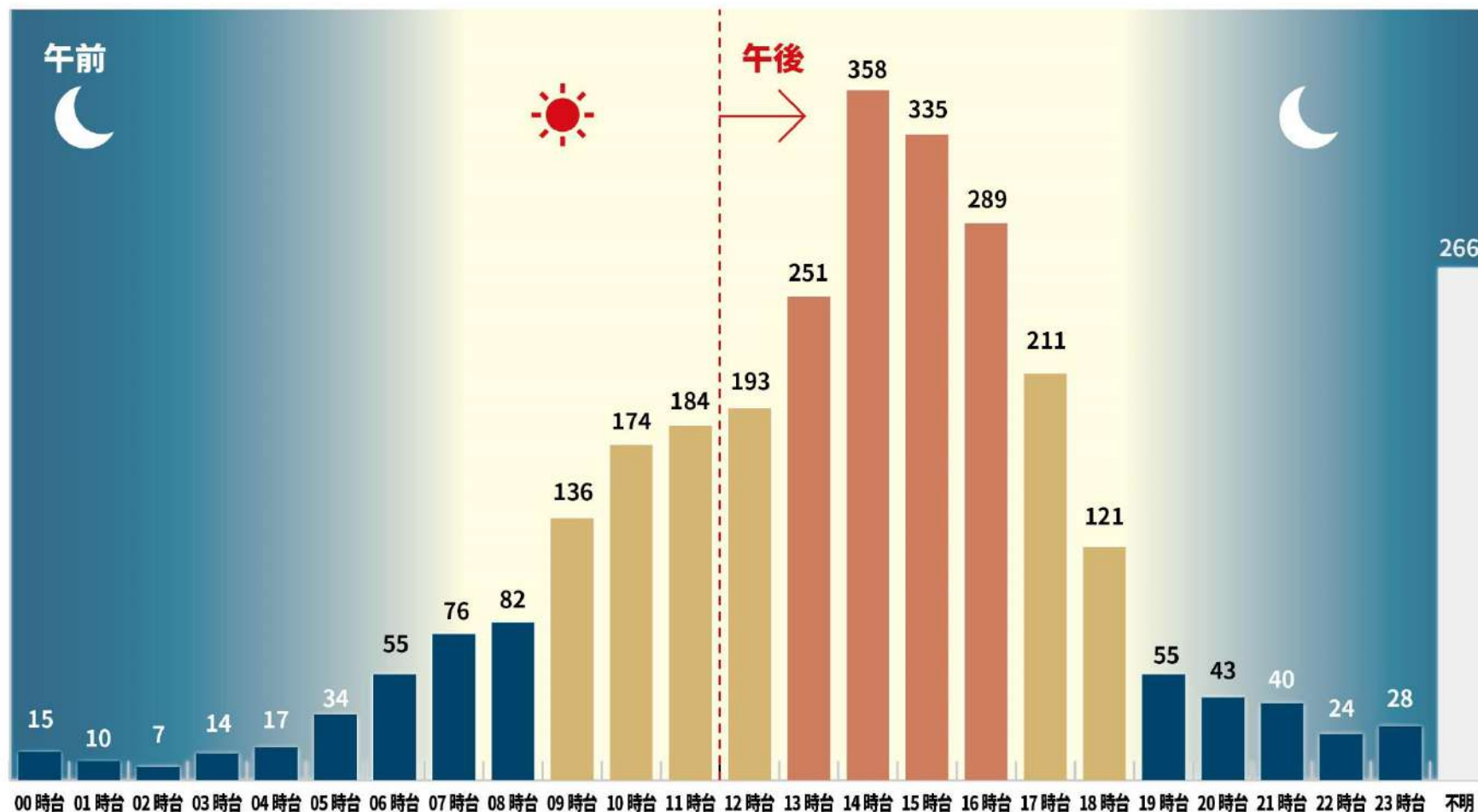
時間帯別の事故発生状況
(2003年 - 2019年)

水難事故の過半数は午後に発生しており、なかでも14時～15時前後をピークとして13時から17時までの4時間に事故が集中しています。

【考えられる原因】 暑さ・疲労、昼食後の眠気、飲酒等

河川財団調査

時間帯別の事故発生状況
(2003-2019年)【n=3,018 (件数)】



水難事故の 5W

Where

場所別

いつ
When

どこで
Where

だれが
Who

何をして・なぜ
What・Why

水難事故発生上位は 都市部からのアクセスが 良好な河川

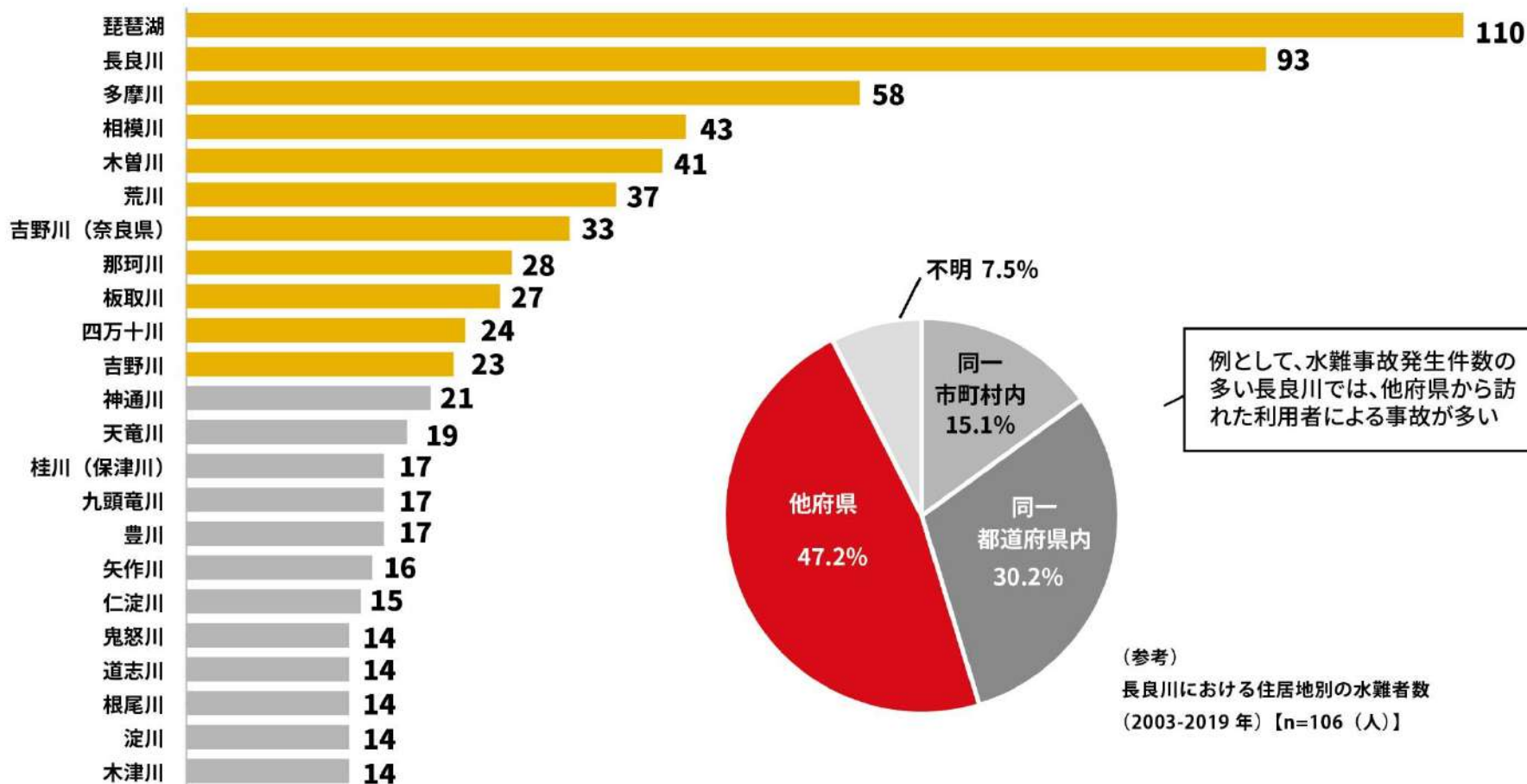
水難事故が多発している主な河川

水難事故発生件数の多い河川の多くは、大都市圏あるいは地方の中核都市からのアクセスも良く、川遊びや釣りなどのレクリエーションやレジャーの場としてよく利用されている河川です。

利用者の絶対数が多いことや遠方からの利用者による事故等も見受けられます。

河川財団調査

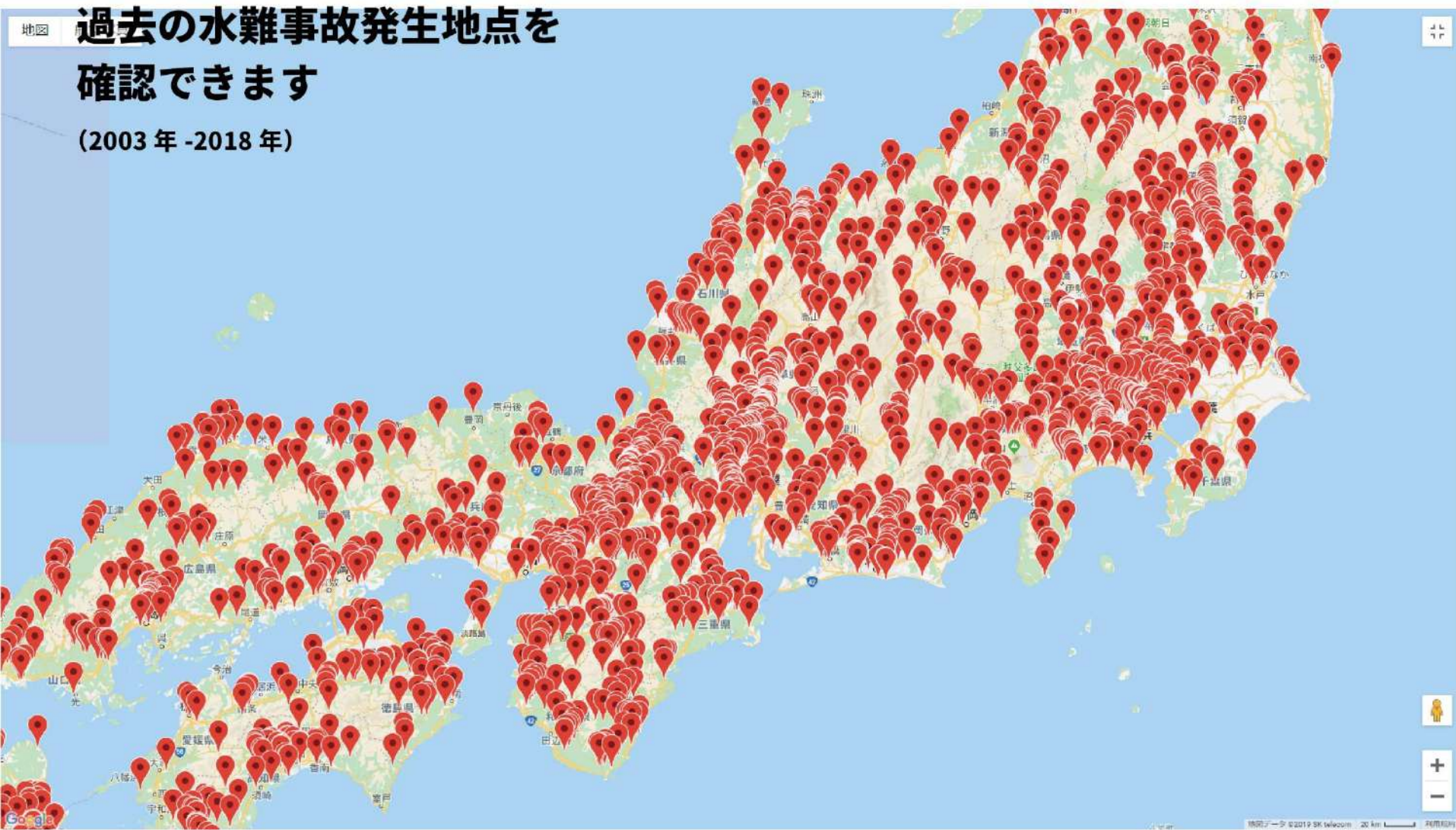
水難事故が多発している主な河川
(2003-2019年)【n=3,018(件数)】



水難事故マップで

過去の水難事故発生地点を
確認できます

(2003年 - 2018年)



水難事故が 多発している地点 があります

(2003 年 -2017 年) ※注:過年度データ

38
箇所

河川財団調査

原則として過去 10 年間にほぼ同じ場所で
水難死亡事故が 3 件以上発生している特定の箇所
(一部 3 件未満でも過去に同様の事故履歴があると思われる箇所は上記に含めている)

場所の特徴として、夏場のレジャーで川遊び、バーベキュー、キャンプによく利用される中流域の大きな河原のある場所や上流域のキャンプ場付近が『水難事故多発地点』の大半を占めています。

事故発生時の利用行動としては、グループで川遊びに訪れて、遊泳や飛び込み遊びをしているうちに事故につながるケースが多いものと思われます。



01	阿武隈川水系	摺上川	(上流)
02	那珂川水系	那珂川	(中流)
03	荒川水系	荒川	(上流)
04	荒川水系	荒川	(上流)
05	荒川水系	荒川	(上流)
06	多摩川水系	多摩川	(中流)
07	相模川水系	相模川	(中流)
08	相模川水系	相模川	(中流)
09	相模川水系	相模川	(河口)
10	相模川水系	道志川	(上流)
11	花水川水系	花水川	(河口)
12	豊川水系	豊川	(中流)
13	豊川水系	豊川	(中流)
14	木曽川水系	木曽川	(中流)
15	木曽川水系	木曽川	(中流)
16	木曽川水系	付知川	(上流)
17	長良川水系	吉田川	(上流)
18	長良川水系	長良川	(中流)
19	長良川水系	長良川	(中流)
20	長良川水系	長良川	(中流)
21	長良川水系	板取川	(中流)
22	長良川水系	板取川	(中流)
23	揖斐川水系	根尾川	(中流)
24	淀川水系	琵琶湖	(湖西)
25	淀川水系	琵琶湖	(湖西)
26	淀川水系	瀬田川	(中流)
27	淀川水系	桂川 (保津川)	(中流)
28	淀川水系	木津川	(中流)
29	紀の川水系	吉野川	(上流)
30	紀の川水系	吉野川	(上流)
31	紀の川水系	貴志川	(中流)
32	新宮川水系	天ノ川	(源流)
33	吉野川水系	鮎喰川	(中流)
34	加茂川水系	加茂川	(下流)
35	四万十川水系	四万十川	(中流)
36	四万十川水系	四万十川	(中流)
37	筑後川水系	城原川	(上流)
38	五ヶ瀬川水系	祝子川	(下流)



水難事故
多発地点の例

岐阜県・長良川
千鳥橋付近
通称「左巻き」

水難事故多発地点の例

千鳥橋付近 通称「左巻き」

岐阜市中心部から車で 20 分ほど
河原でのバーベキューや川遊び、水泳、
水上バイク等による利用

2003-2018 年に計 9 件、計 6 人死亡



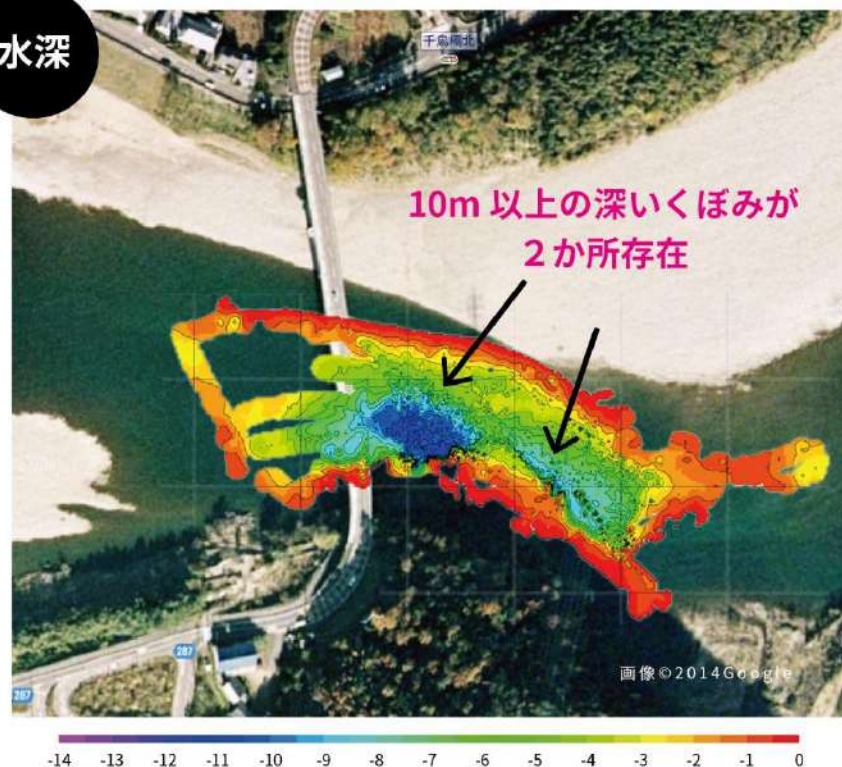
水難事故多発地点：通称「左巻き」の調査（岐阜大学との共同研究）

河川における水難事故多発地点の流れ及び水温分布に関する研究（平成 22-23 年度）

ADCP（音響ドップラー流速プロファイラー）等による測定

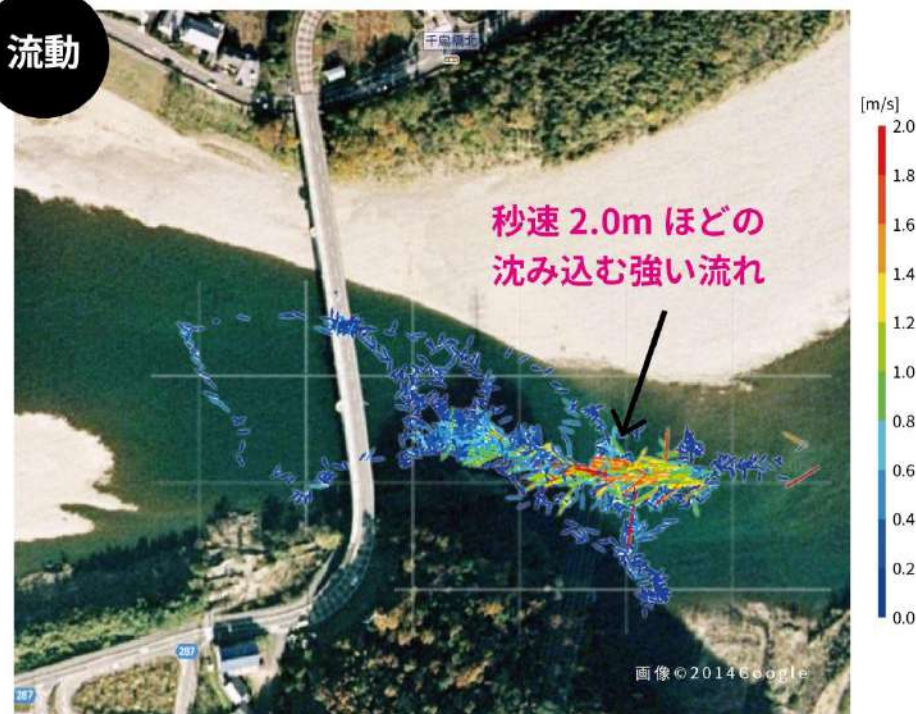
下記画像：測定データを Google Earth 画像に重ね合わせた

水深



河原から急に深くなる。深い川底に引き込まれる。

流動



水泳のオリンピック選手並みの泳力がないと
流れに逆らっては泳げない

この周辺地区で育った子供たちの間では、この場所の危険性が知られている。昔の地区の子どもたちの間には、渦に巻かれた時の対処法が川遊びの智恵として伝わっている。 【 地元に伝わる対処法の存在 】

河川工作物付近には 急な深みや複雑な流れ などが潜みリスクが高い

工作物付近の事故

河道内の工作物付近で起こった事故は、2003年～2019年に発生した3,018件の水難事故のうち484件で、全体の約16%を占めています。

工作物の種別として、これまでの累計では「取水堰・頭首工」が最も多く、工作物付近の事故の約3割を占めています。次いで「橋梁（抜水橋や潜水橋）」、「橋脚」、「落差工・砂防堰堤」付近の事故が上位となっています。

河川財団調査

河川工作物付近の事故発生状況
(2003-2019年) [n=484 (件数)]



堰堤等の直下流ではリサーキュレーション（循環流）が発生することがあり、捕捉されると脱出が困難
また、洗堀によって深くなっているところもある

水難事故の 5W

Who

属性別

いつ
When

どこで
Where

だれが
Who

何をして・なぜ
What・Why

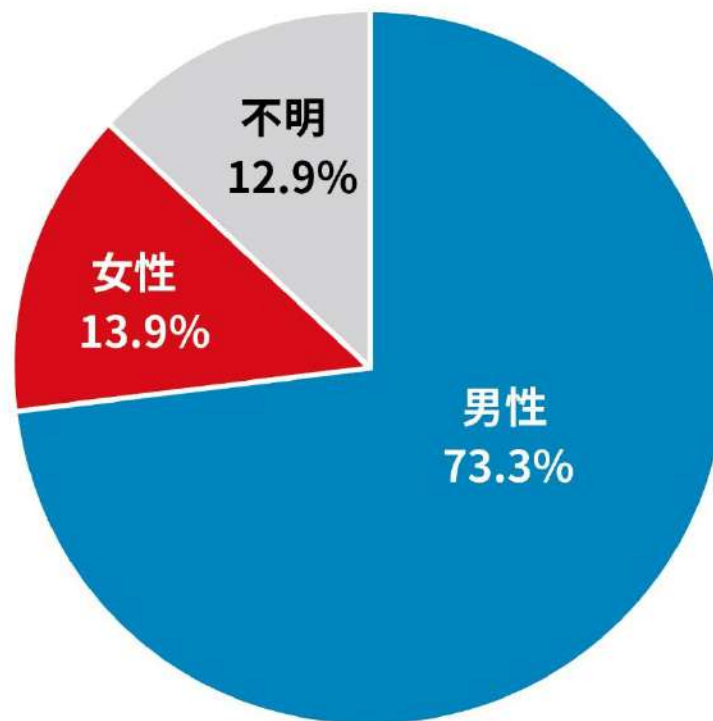
水難事故の被災者の 約 7 割は男性

属性別の水難者数
(2003 年 -2019 年)

水難事故の被災者の大半は男性であるという特徴が顕著です。なお、「統計からみたスポーツの今昔」(平成24年総務省)によると、1年間に水泳を実施した人の男女比には大きな差は見受けられません。

なお、性別「不明」は複数人数のグループで河川利用中に事故にあったケースなど、報道記事から個々の性別に関する詳細情報を得ることができなかった被災者です。

河川財団調査



属性別の水難者数
(2003-2019 年)【n=4,580 (人数)】

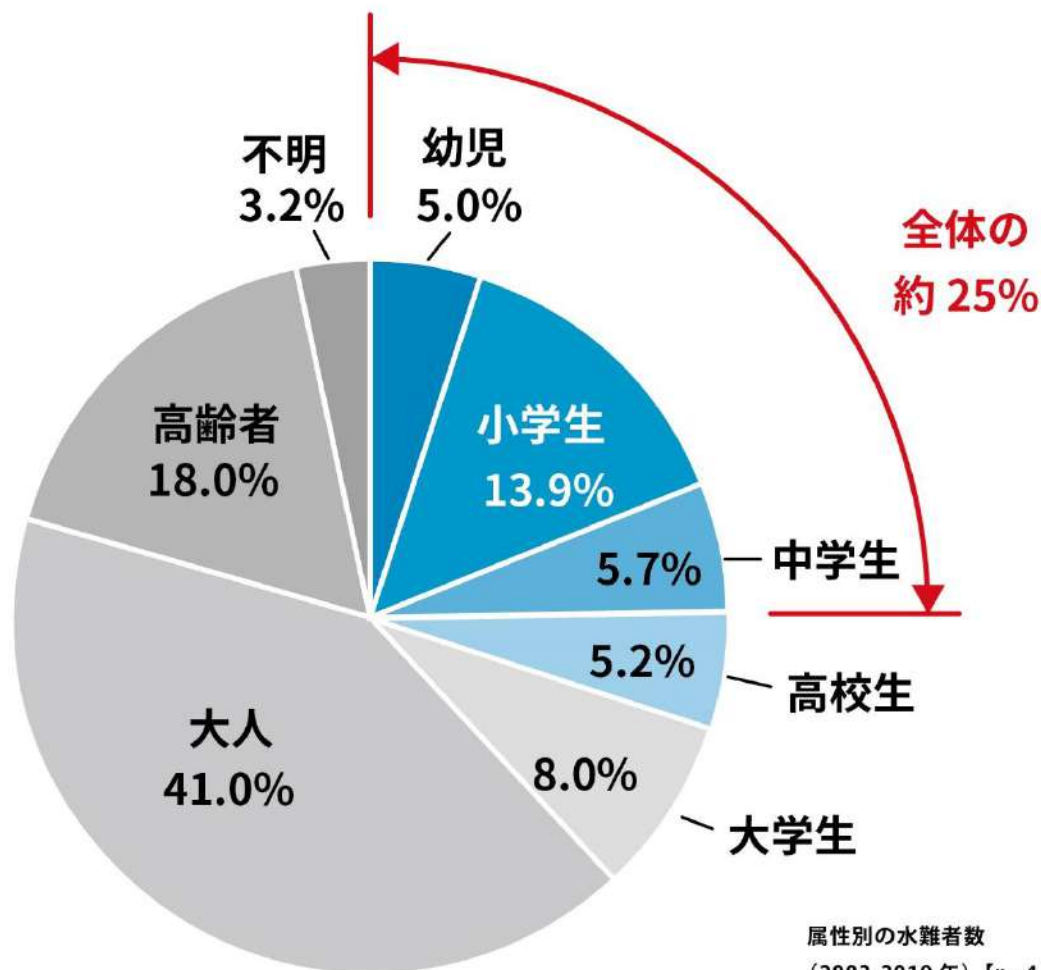
中学生以下の子どもの 水難者数は全体の 1/4

属性別の水難者数
(2003 年 -2019 年)

属性別で最も多いのは、属性区分で年齢幅が広い「大人」で水難者総数の約4割を占めています。

また、「子ども」に相当する「幼児」から「中学生」までの各属性の合計は全体の1/4となります。
(警察庁の統計では中学生以下を「子ども」と定義)

河川財団調査



幼児・小学生・中学生の 川遊びに見受けられる 事故パターン

中学生以下子どもだけの川遊びにおける事故は、これまでの調査における事例の整理から、よく見受けられるケースとして、いくつかのパターンに類型化しました。

河川財団調査

(被災者の年齢層は、事故事例を概観した定性的な印象を示したものであり、定量解析の結果を示したものではありません)

注 被災者の年齢層：左側に示した事故パターンで
●：よく見受けられる被災者の年齢層
○：時々見受けられる被災者の年齢層

子どもの事故でよく見受けられる事故パターンは、河岸から転落しておぼれてしまうケースです。

幼児や小学校低学年の児童が一人で遊んでいて転落した場合は、初期対応や救助行動ができないケースが多く、転落が死亡事故に直結した事例が多く見受けられます。

被災者の年齢層



キーワード	事故パターン	幼児	小学生	中学生
【一人遊び】	・ひとりで遊んでいて河岸から転落したケース	●	○	
【深み】	・川遊びで低水路や流れに立ち入り、深みにはまっておぼれたケース	●	●	●
【速い流れ】	・川遊びで流れに立ち入り、速い流れに流されておぼれたケース	○	●	●
【拾おうとする】	・落としたボールなどを拾おうとしておぼれたケース	●	●	○
【助けようとする】	・おぼれた弟や妹を助けようとして二次災害を併発したケース	●	●	○
【急な増水、中州】	・急な増水で中州などに取り残されたケース		○	●
【増水時】	・増水時に川遊びをしておぼれたケース		●	●
【渡ろうとする】	・比較的大きな川を泳いだり歩いたりして対岸に渡ろうとしておぼれたケース		○	●
【河口で流される】	・河口付近で川遊びや遊泳をして海に流されたケース		●	●
【飛び込み遊び】	・滝や堰堤で飛び込み遊びをしておぼれたケース		○	●
【別行動】	・家族や大人と一緒に川を訪れたものの大人と別行動し、子どもだけで川に立ち入っておぼれたケースなど	●	●	

幼児や小学生の事故で見受けられる転落による事故は少なくなり、かわりに川遊びや遊泳中の事故が増加します。

危険箇所や増水時の川遊びによる事故もしばしば見受けられます。

水難事故の 5W

What・Why

行動区分・同行者の有無と二次災害

いつ
When

どこで
Where

だれが
Who

何をして・なぜ
What・Why

川の中だけでなく 水際等の陸域にも リスクがある

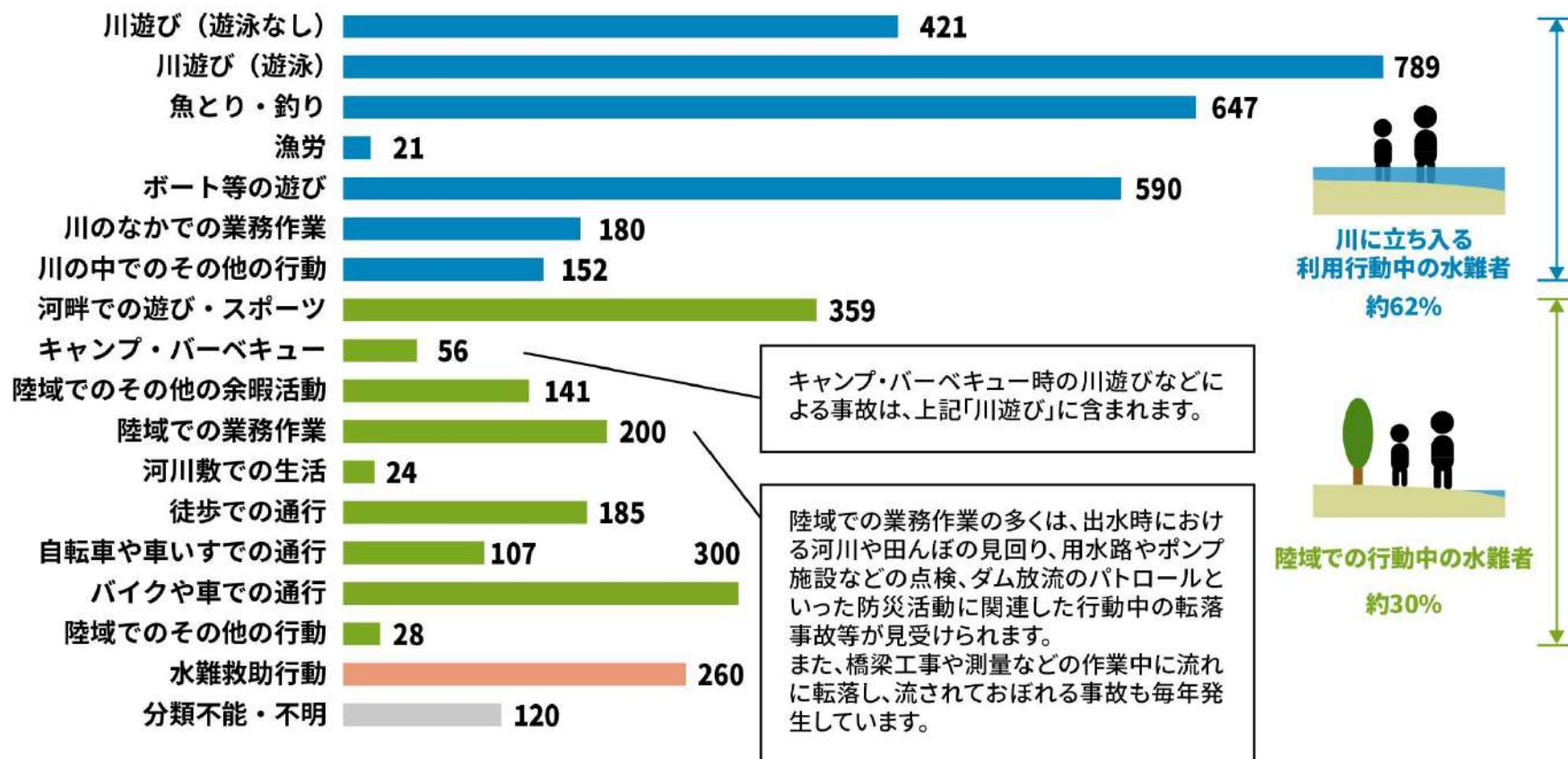
行動区分別の水難者数
(2003年 - 2019年)

利用行動別の被災者数を概観すると、水面を利用したり、川の中に立ち入ったりする行動ほど水難事故にあうリスクは高くなります。(水難者数全体の約6割)

一方、陸域を利用している時や通行中の事故も水難者全体の約3割を占めており、陸域と言えどリスクが高いことが分かります。これらは河岸や堤防天端、橋などから不用意に転落したり、不安定な河岸で滑落したりして事故に至る場合がみうけられます。

河川財団調査

行動区分別の水難者数
(2003-2019年)【n=4,580(人)】



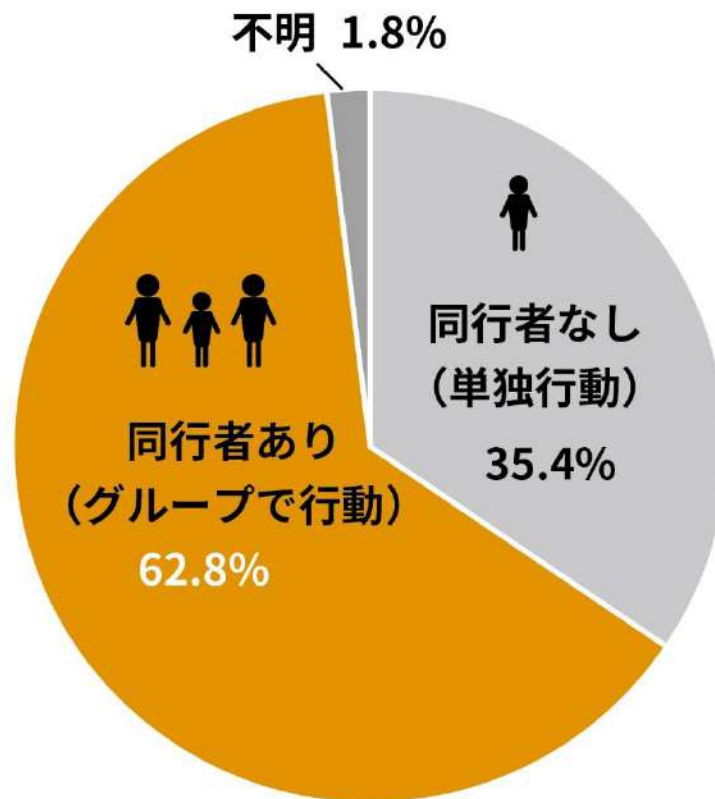
グループで行動中の 事故件数は約 6 割

同行者の有無別の事故件数
(2003 年 -2019 年)

同行者ありの事故、例えばグループで川遊びをしていて発生した事故は、全体の約6割を占めています。グループでも多くの事故が起こりうるため、複数人で行動すれば安全だと思い込んだり、油断したりすることには注意が必要です。

一方、同行者なし(単独行動)の事故では、ひとりで行動中に川に転落したりすると救助の手だてがなく、ちょっとした転落がそのまま人的被害につながるケースも多いと推察されます。

河川財団調査



グループで活動中の事故も多く発生。グループだから安全だと判断することには注意が必要。

川に転落したりすると救助の手だてが無い。
(人的被害につながる)

同行者の有無別の事故件数
(2003-2019 年)【n=3,018 (件数)】

グループに 大人がいても事故数が多い

同行者の構成別の事故件数
(2003年-2019年)

2003-2019年の間の「同行者あり(グループで行動)」中の事故を、同行者の構成別にみた場合、最も多いのは「大人のグループ」で、全体の1/3(約37%)を占めています。

家族連れなど大人に引率されたグループでも事故が多く発生していることから、グループに大人がいても安心ではなく、大人・子ども共に安全管理を行うことが重要です。

河川財団調査

同行者の構成別の事故件数
(2003-2019年)【n=1,896(件数)】

中学生以下の子どもだけのグループ 314

高校生のグループ 128

大学生のグループ 200

子ども～大学生のグループ 18

大人のグループ 717

家族連れ 396

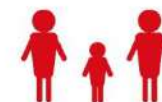
大人に引率された子どものグループ 65

大人に引率された高校生のグループ 10

その他のグループ 48



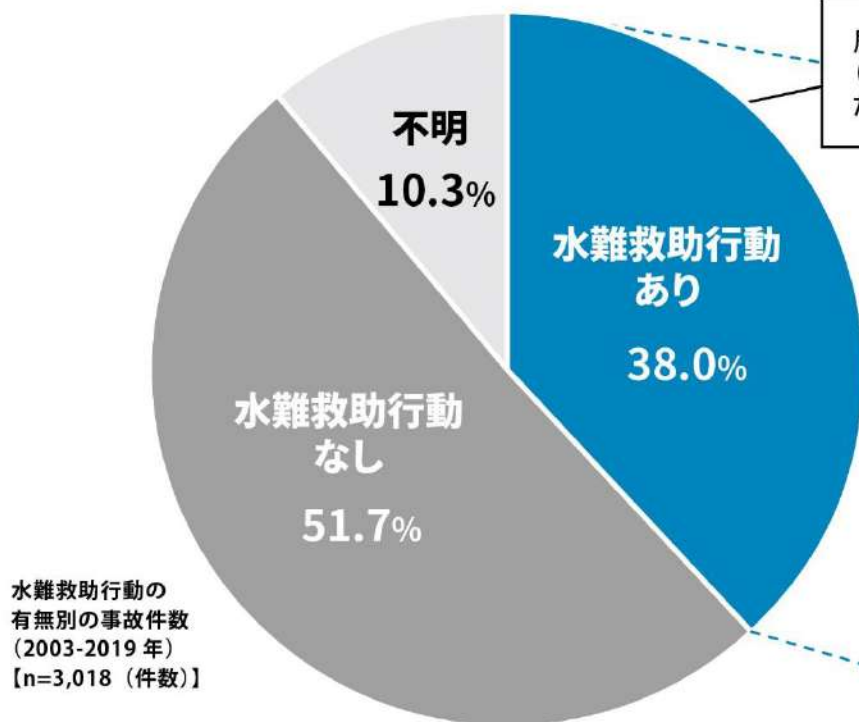
子ども・高校生・大学生
だけのグループ



大人が含まれるグループ

水難事故件数の約半数で 水難救助行動が 行われなかった

水難救助活動の有無別の事故件数
(2003年 - 2019年)



ここで対象とする「水難救助行動」とは、事故発生時または発生直後にその場に居合わせた人による水難救助行動に限定

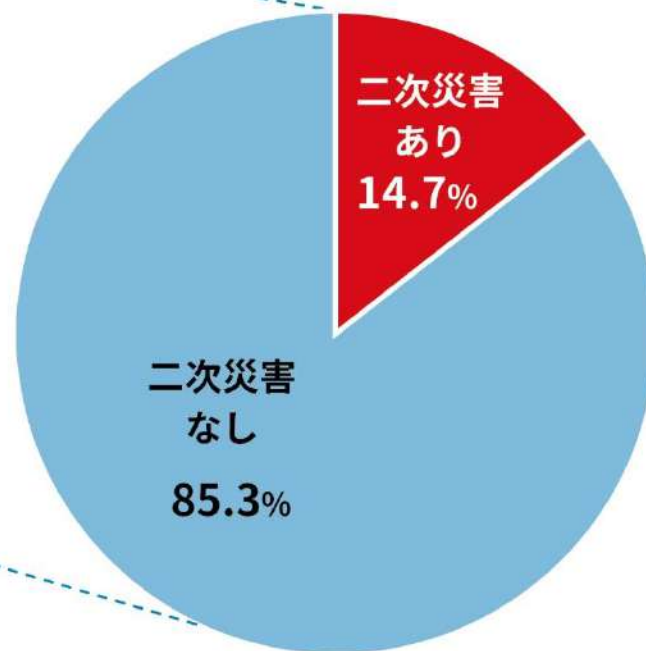
事故発生の通報を受けてしばらくして駆けつけた消防や警察による救助活動、及び事故発生から数時間～数日経過した時点でのいわゆる「探索活動」には含まない。ただし、「増水に遭遇して中州に取り残された事故事例」に関しては、事故発生時の被災者や現場の状況が数時間にわたって同じ状態で継続するケースが多いことから、発生直後～数時間後の救助活動も「水難救助行動あり」とみなした。

事故直後に同行者やその場に居合わせた人などによって救助行動がとられているのは水難事故全体の4割程度です。水難事故の約半数では水難救助行動は行われなかったものとみられます。(溺れているのに気がつかなかった、気がついたが救助行動ができなかった等)

また居合わせた人による水難救助行動中(川に立ち入って手や棒を差し伸べる等を含む)の約15%で、同行者が事故に遭う二次災害が発生しています。

河川財団調査

居合わせた人による救助行動等
(手や棒を差し伸べる・飛び込む・ロープを投げる・見失った同行者を捜そうとして川に入る等の行動全体を含む)



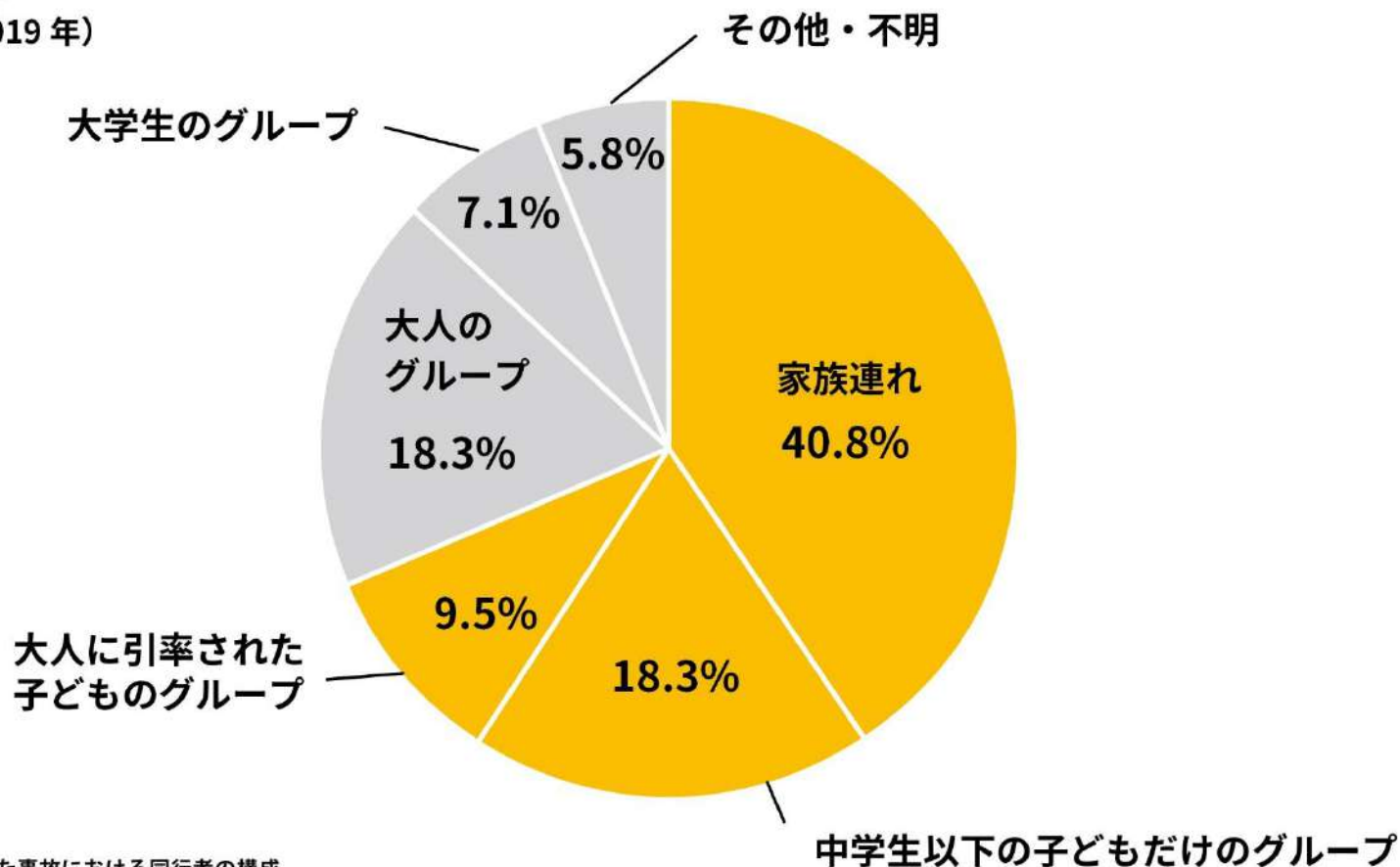
水難救助行動中の二次災害の発生状況
(2003-2019年)【n=1,148 (件数)】

二次災害の起きた事故で多いのは子どもを含んだグループ

二次災害が発生した事故における同行者の構成
(2003年-2019年)

救助行動中の二次災害の発生で特徴的な点は、子どもが含まれるグループでの事故が多く発生していることです。
すなわち、「家族連れ」・「中学生以下の子どもだけのグループ」・「大人に引率された子どものグループ」で最初の水難事故が起きた場合、同行者がおぼれた子どもを助けようとして飛び込むなどし、二次災害に至るケースが多くみられます。その場合の二次災害の被災程度の多くは死亡・行方不明となっています。
(二次災害での水難者は、保護者や引率の大人、一緒にいた年上の子ともであることが多くみられます)

河川財団調査



水難救助行動中に
二次災害が発生した事故における同行者の構成
(2003-2019年) [n=169 (人数)]

飛び込んで助けるのは 危険度レベル最上位の 救助法

溺れている人を助ける水難救助は、救助しようとする人自身のリスクが高いため、リスクの低い方法を優先して選択する必要があります。

自分自身の安全を最優先するためには、可能な限り水の中に入らずに陸上で救助を行うことが重要です。

陸上で行う時と水の中に入って救助を行う時とではリスクレベルが大きく違います。下記③と④の危険度レベルは1しか違いませんが、危険性は急激に高まります。

危険度別救助法 6 つのレベル (セルフレスキュー・ファーストの原則)

危険度
レベル

- | | | |
|---------------------------|--------------------------------------|-------|
| ① 声をかける（声で指示する） | 声がけをして安全な場所へ指示・誘導 | |
| ② 浮くものを投げる | 浮き輪や浮環などの浮力体を投げる | |
| ③ スローロープや長いものを使う | 浮く素材のスローロープを使ったり、棒等を差し伸べる | 主に陸上 |
| <hr/> | | |
| ④ 浅瀬をチームで渡る
（ひざ下以下の水位） | ひざ下以下の水位の場所を浅瀬横断の
手法を用いてチームを組んで渡る | 水上・水中 |
| ⑤ ボートを使う | カヌーなどを用いて水上からアプローチする | |
| ⑥ 泳いでいく | 泳いで要救助者に近寄る | |

3

リスクへの対策例

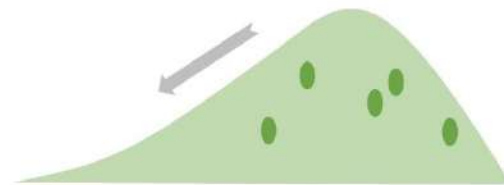
How
to prevent from water accidents

「川」、それは 水があり、流れている場所

雨が降るから、水がある



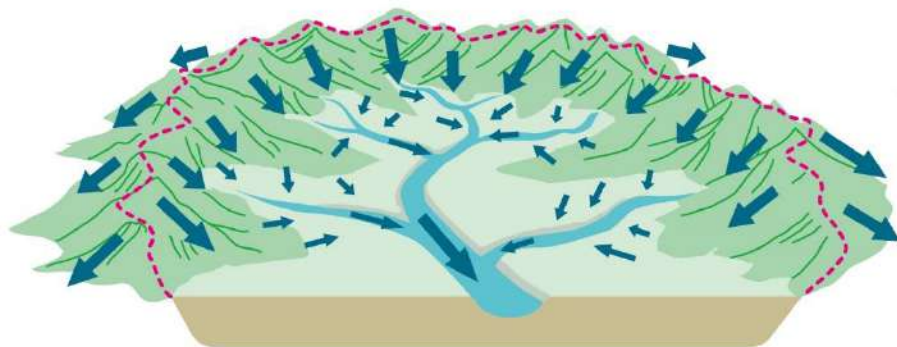
高低差があるから流れる



水があって流れている場所が川です。
大地に雨が降るから水があり、高低差があるから流れます。

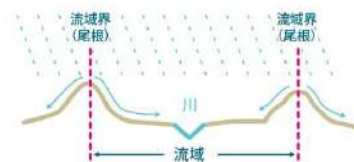
大地に降り注いだ降雨が、高いところから低いところへと時間をかけて集まり、やがて海に注ぎます。
大きな質量を持った水が、重力により移動することで、大地を削り土地の様子を変えるほどのエネルギーを生みだします。

この「流れがある」ことが、川の大きな特徴の一つであり、恵みと災いの両方をもたらします。
川は「水があり」、「流れている」。その特徴を踏まえた上で、水難事故のリスクを考えることが重要です。



ある川に、降った雨が集まる大地の範囲を「流域」という。
水が集まることで大きな質量となり、それが流れることで
巨大なエネルギーを生み出す。

下流側は晴れていても、上流側で雨が降ればやがてその水は下流にやってくる。
同じ流域内では、今いる場所の上流側の雨の様子を知ることが重要。



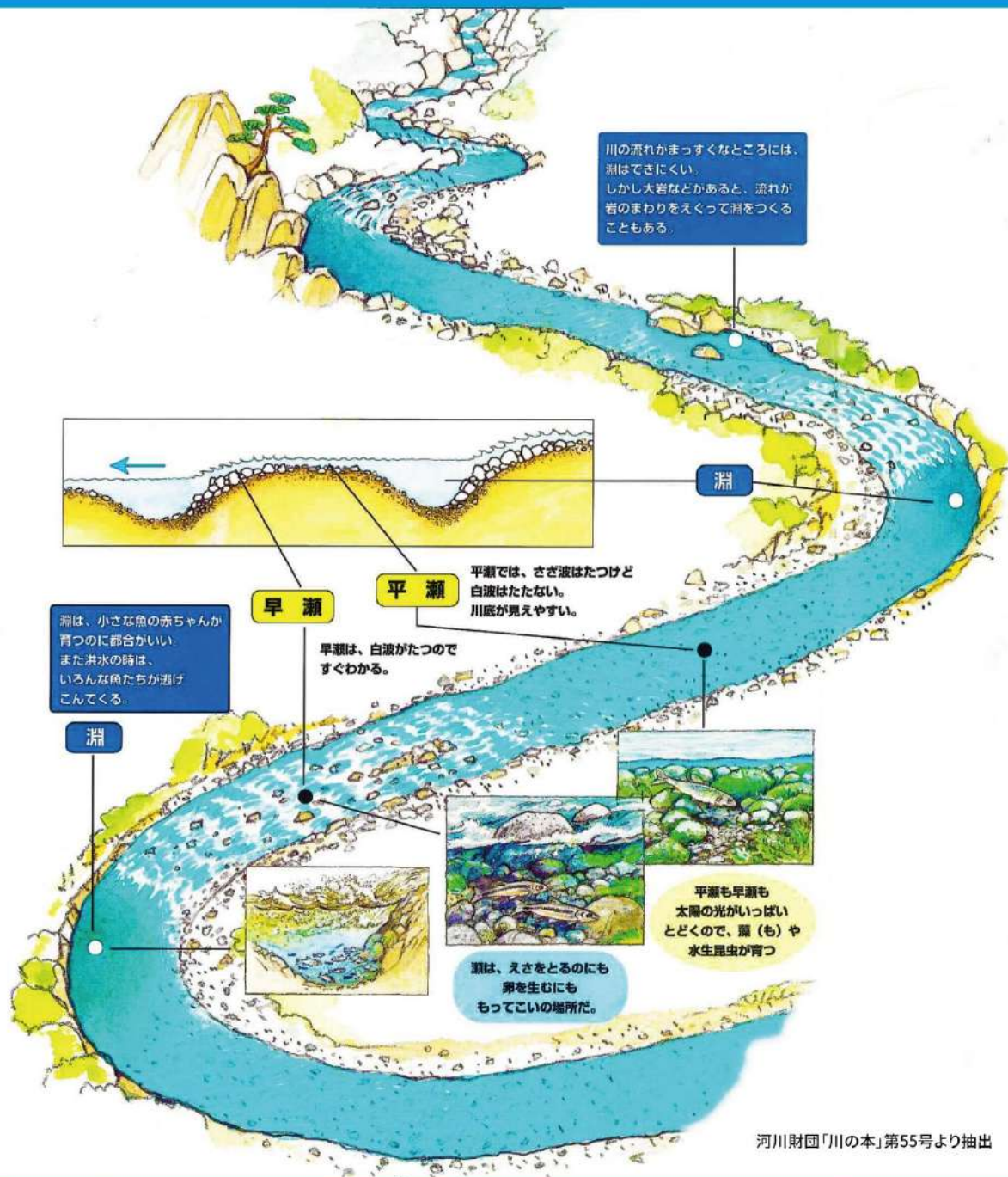
流れがあるから 浅いところと 深いところがある

川底の形は水の流れ方や強さなどで変化します。
流れの速い「瀬」は浅く、
流れがゆるやかな「淵」は深い。

川にすむ生き物たちにとって
瀬と淵はそれぞれ役割があり、
大切な場所となっています。

流れがあることによって、
川には浅いところと深いところが存在しています。

ひとくちに川といっても、場所によって深さや
流れの様子は一定ではなく、
それらが複雑に絡み合っているのです。





リスク①

「水」が、
ある。



水難死亡事故の多くは 溺死

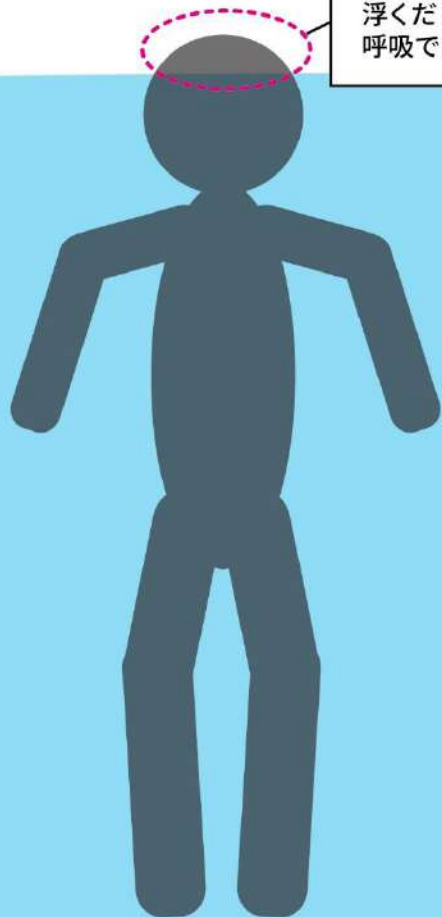
致命的な外傷や低体温症などを除き、
死因の最も大きな要因を占めるのは、
息ができないことによる溺死です。

真水に対して、人は 体の 2% 程度が浮く

空気を肺に
吸い込んだ状態

2%

頭のとっぺんが
浮くだけでは、
呼吸できない



真水1に対する人の比重(空気を肺に吸い込んだ状態)は0.98(水難学会調べ)と言われています。

そのため体の2%程度が水に浮くことになります。

その2%を呼吸をする口や鼻に集中させることにより、落水しても静水域等で助かる可能性があります。

2%



真水：人 = 1：0.98

バランスをとって、仰向けに
なり、2%を口と鼻に集中さ
せる(要訓練)

海水であれば、より浮きやすい※のですが、
川は真水に近いのです。

川には、流れがあり身体に水平方向の圧力がか
かります。

また、鉛直方向に引っ張られる流れが発生して
いる場合もあり、バランスをとるのが困難です。

川においては水面下に様々な複雑かつ強い流
れがあるのです。

※仮に海水の比重を1.02とすると、体の約4%程度が浮く事になり、
川の倍となります。



穏やかな流れ

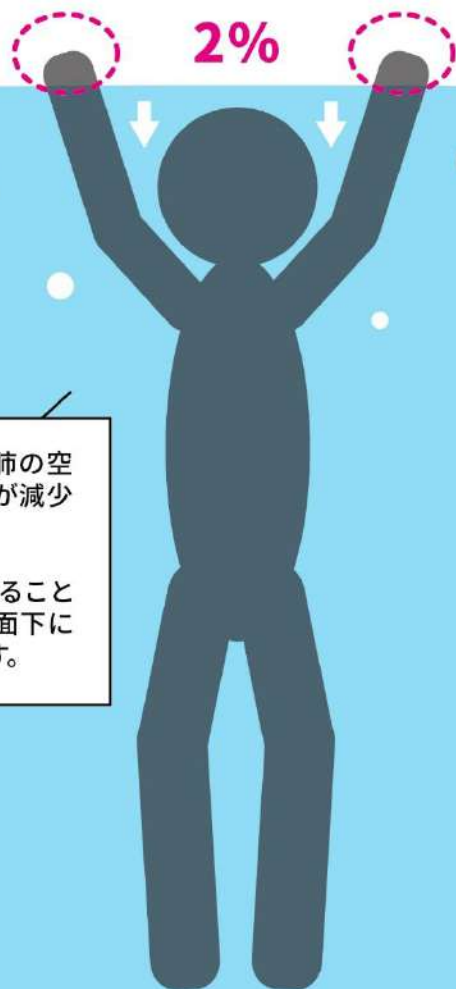


複雑な流れ

ライフジャケットで 常に頭部を水面上に

ライフジャケットを正しく着用することで、
頭部を水面から上に出すことができます。

このため、常に口と鼻が水面上にあり、
容易に呼吸ができます。



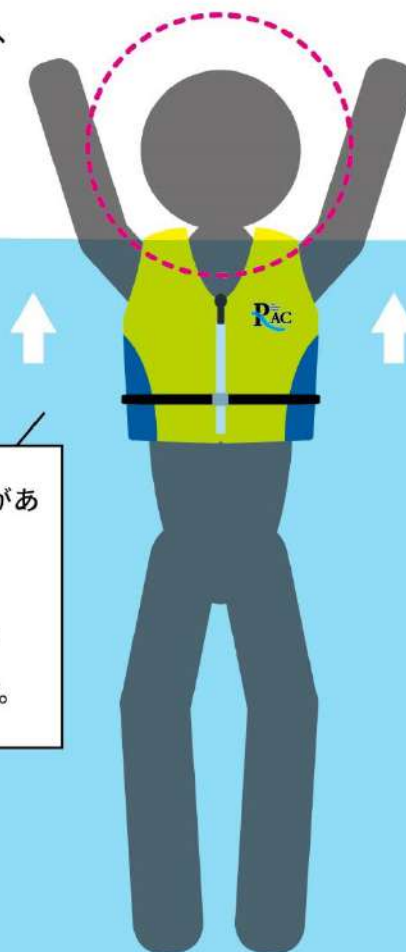
助けを呼ぶと、肺の空気が抜け、浮力が減少します。

また、手を挙げることで頭部がより水面下に沈んでしまいます。

7.5kg程度以上の浮力(大人)があれば、頭が常に水面から出ます。
(子どもで4kg程度以上)

頭が出れば常に呼吸ができます。

手が自由になり、助けも呼べます。



ライフジャケット着用は 呼吸を確保する 最も効率的で 効果的な手段

魚類と違い、人間は水の中では呼吸をすることができません。水の中で活動しようとするためには、常に頭部を水面から出して呼吸をする必要があります。特に河川においては水面下に様々な複雑かつ強い流れがあり、陸上からの目視ではなかなか判別しにくい深みがあります。

このような川の環境下で頭部を水面上に出し続けるには人間の持つ浮力だけでは限界があり、何らかの形で浮力を補う必要があります。

その最も効率的で有効な手段がライフジャケットを着用することです。



ライフジャケットが 生死を分けた例

ライフジャケットを着用して命が助かった事例が、
着用の重要性を示唆しています。

河川財団調査

同一条件下（日時・場所・天候等）で ライフジャケットを着用して助かった主な事例

事例

1

2007年 8月
徳島県 吉野川

川下りのカヌーが転覆。
乗っていた3人のうち、**ライフジャケット着用の2人**は岸まで泳ぎ無事だった。
ライフジャケット未着用の1人が流され死亡。

事例

2

2003年 8月
高知県 四万十川

4人家族のうち、子ども2人が川遊びをしているうち、1人が流された。
助けようとした親は流され死亡。
子どもはライフジャケットを着用しており、近くにいた人に助けられた。親は**未着用**だった。

河川財団が、2003-2016年の間マスコミ（新聞・テレビ等）の報道により収集した水難事故事例2,420件のうち、「救命胴衣」または「ライフジャケット」着用の有無について記載がある事例を抽出
それらの事例の中から、同一条件下（日時・場所・天候等）にある複数の河川利用者のうち、ライフジャケット着用者・未着用者が混在していた事例を抽出・整理

測量中の事故事例

測量中の事故は2003-2016年の間、9件発生※

河川財団調査

ライフジャケットを着用して助かった事例と、直近の事例を紹介をします。

河川財団が、2003-2016年の間マスコミ（新聞・テレビ等）の報道により収集した水難事故事例2,420件のうち、「測量」という用語の記載がある事例を抽出

ライフジャケットを着用して助かった事例

事例

1

2005年 11月
長野県 犀川

測量作業のゴムボートがバランスを崩して転覆、乗っていた男性3人が流された。
3人は救命胴衣を着けており、1人は100m流されてから自力で岸まで上がり、残る2人は約200～300m下流の中州に泳ぎ着いて消防隊員に救助された。

ライフジャケットを着用していなかった事例

事例

2

2016年 11月
新潟県 信濃川

川に入って水深の測量をしていた会社員の男性が流された。川岸にいた別の作業員によると、突然姿が見えなくなったという。約250m下流で発見され、病院に運ばれたが死亡が確認された。
ウェットスーツは着用していたが、**ライフジャケットは着用していなかった。**



その後、信濃川下流河川事務所では、水難事故防止を目的に、河川におけるリスクマネジメントの概念やライフジャケット着用に関する知識や技能を身につける講習会が開催された



リスク②

「流れ」が、
ある。

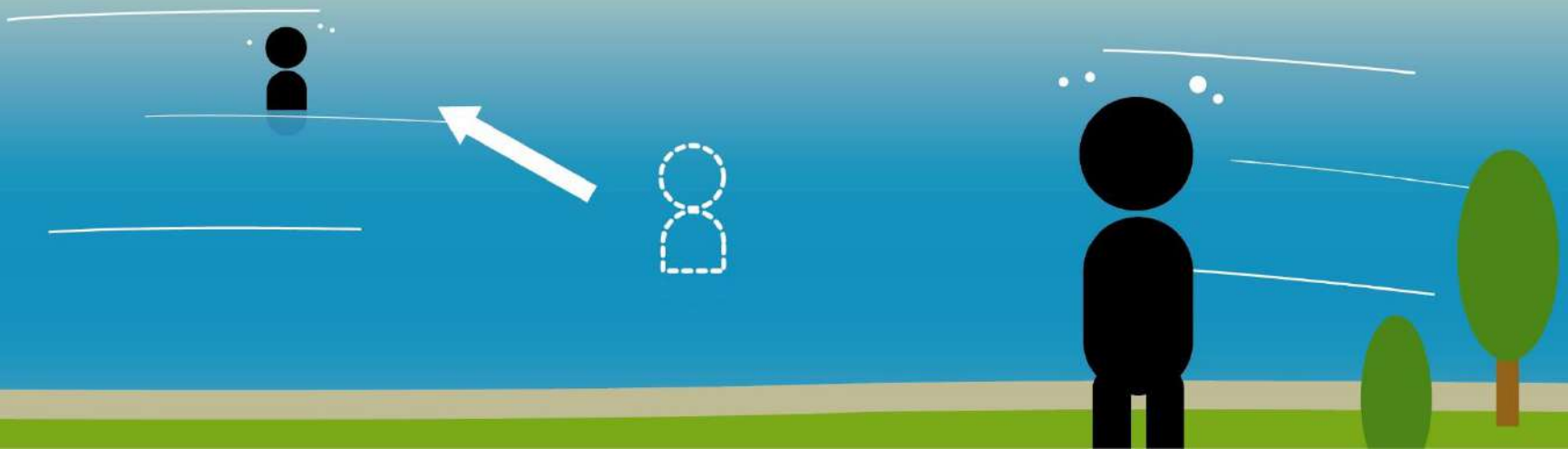
瞬時に流され、移動します

学校のプールと違い、
川では、水が流れています。

例えば流速1m※の流れでは、
1秒間に1m流されることになります。
数秒で陸上からは手が届かない場所へ移動してしまいます。

(※人が陸上で歩く程度の速さと同等)

流れの速い溪流などでは周りの人が気づき助けようとしても、
下流や川底に流され、対処できない状況となってしまいます。



家族やグループ・団体に バックアップ体制をとる。 子どもが流されたあとの ことを想定しておく。

子どもより上流側にいると、流されたときに救助が間に合わない。追いつこうとしてあわてて飛び込むと二次災害が発生しやすい。

活動場所の、流れの様子や速さ、立ち入る可能性のあるエリアの深さの様子、流れを変化させる地形や岩、人工物等の存在などを確認することが重要。
ただし流れの様子や深さを見極めるのは難しい。また、川の水量や流れの様相は刻々と変化する。川は気象と地形が生み出す大自然そのものだ。

川には流れがあります。その流れの強さとエネルギーは想像以上であり、力に押される、あるいはバランスを崩すなどして、簡単に流されます。

子どもを川で遊ばせる際、同行者が上流側にいると、流れの速さにより、いざという時に救助が間に合わないことがあります。あわてて飛び込むと救助しようとした人が被害にあう二次災害につながります。

そのため、大人もライフジャケットを着用した上で、流されたことを想定し、子どもよりも下流側にいることです。
(同時にその大人が流されることも想定が必要です)

ライフジャケットを着用した大人が下流側に。流れたことを想定し、子どもを救助する体制(バックアップ)をとる。

川には流れのゆるやかな場所がある。流された場合に備え、あらかじめ下流側の流れの緩やかな場所を確認しておく。(その場所が深くとも、ライフジャケットを正しく着用することで浮いておくことができる)

川の流れが生み出す 強力な動水圧

流れの速さが2倍になれば、受ける水圧は2乗に比例して強くなります。そのため大人が歩く程度の流速でも、自身が流れの中で何かに引っかかると1人の力ではどうすることもできないほどの動水圧を受けることがあります。足がつきそうでも、流れのある場所では、決して立とうとせず「浮く」ことです。

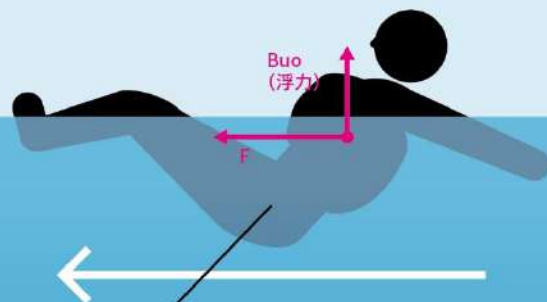
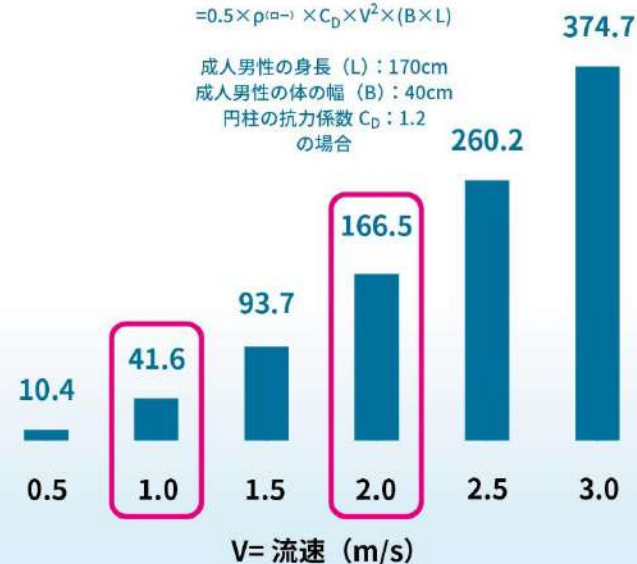
F= 全身にかかる水平の力 (kg)

$$= 0.5 \times \rho (\text{kg/m}^3) \times C_D \times V^2 \times (B \times L)$$

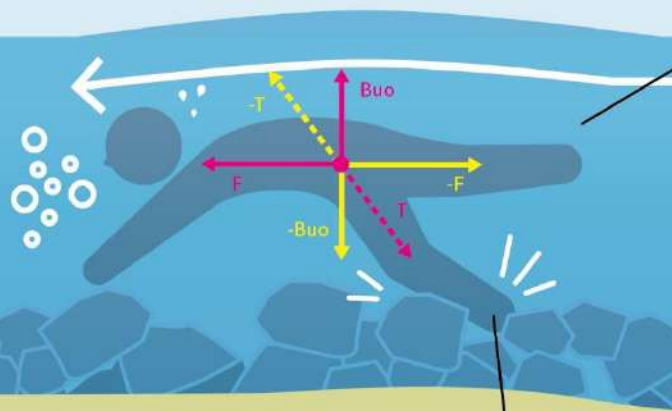
成人男性の身長 (L) : 170cm

成人男性の体の幅 (B) : 40cm

円柱の抗力係数 C_D : 1.2
の場合



流れのある場所では、立たずに浮くことが重要(ライフジャケットは動水圧を回避するためにも最低限必要)



自身が何かに固定されると、水平方向の強力な動水圧を受ける。流速2mの場合は約160kg (2ℓのペットボトル80本分と同等) となる。自然の生み出す力に対抗するのは困難。

足が石の間等にはさまれると、たとえライフジャケットを着いて、流れに押されて水中から顔を出すことが極めて困難になる(フットエンタラップメント)。このような致命的事故は、歩行できるような浅い場所で発生することが多い。

ライフジャケットで 浮力を確保すれば 進行方向が見える (障害物を回避できる)

適正な浮力のあるライフジャケットを正しく着用することで、頭部が水面より浮かびます。そのため、流れの進行方向の様子を目視することができます。

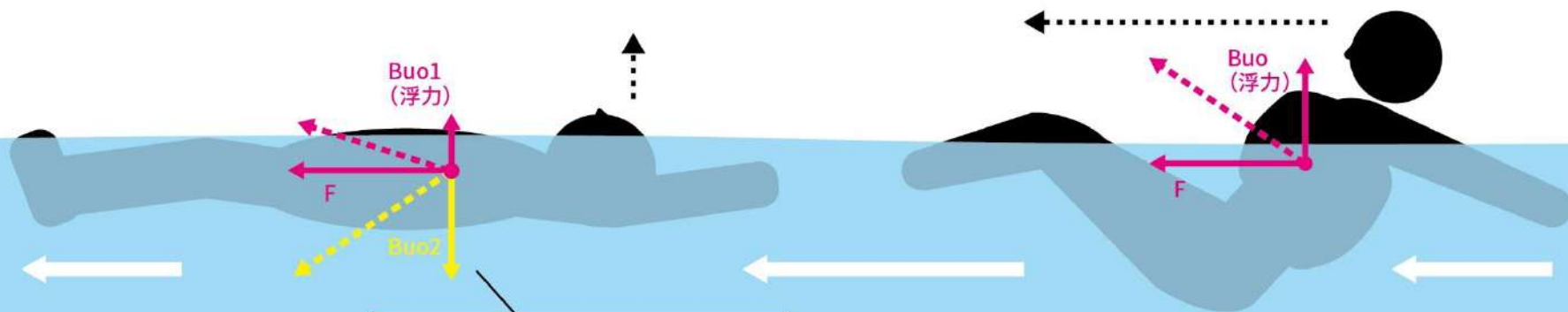
進行方向に岩場等があれば、足で蹴って横に回避することもできます。フットエントラップメント等を回避するために足を水面に出し、両腕でバランスを取り身を守りながら流れることができます(ディフェンシブスイミング)。

また、ライフジャケットがあれば、前方の流れの緩やかな場所を見つけ、クロールのような泳法で顔をあげ続けながら一気に泳ぐことも可能になります。(アグレッシブスイミング)。

目視できるのは真上周辺に限定。
流れの進行方向の様子が分から
ず障害物を回避できない。

ライフジャケットの浮力があ
れば進行方向を目視するこ
とができる。

障害物にあたる等し、肺の空気が抜
けると、体が沈む。
流れの中では水中に没することは危
険な状況となる。



ひざ程度の浅さでも 流れが速い場合、 大人でも流される

今いる場所が浅くても、一歩先に深みがあるかもしれません。

また、河川工作物付近にも局所的な洗堀等による深みが生じている場合があります。

大人の膝程度の浅さでも、流れが速い場合大人でも流されることになります。
(一般的に瀬は流速が速いのです)

水位が上昇すればそれだけ受ける力も大きくなります。

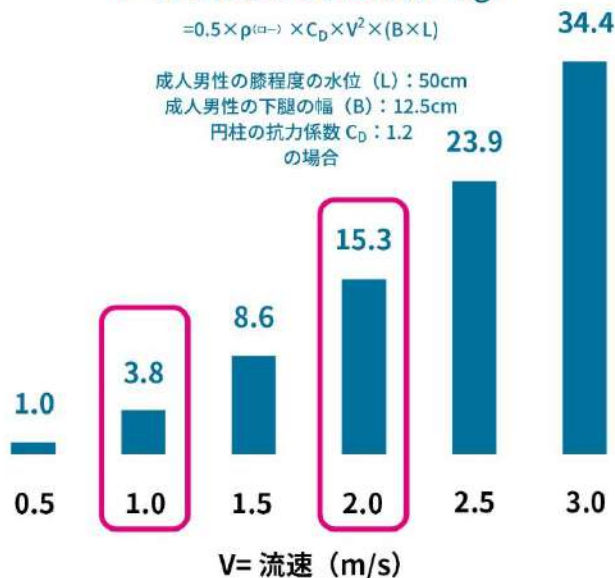
$F = \text{片足にかかる水平の力 (kg)}$

$$= 0.5 \times \rho(\text{水}) \times C_D \times V^2 \times (B \times L)$$

成人男性の膝程度の水位 (L) : 50cm

成人男性の下腿の幅 (B) : 12.5cm

円柱の抗力係数 C_D : 1.2
の場合



体重60kgの場合、摩擦係数 $\mu=0.5$ として
抵抗力は30kg
(膝下没水による浮力等は無視)

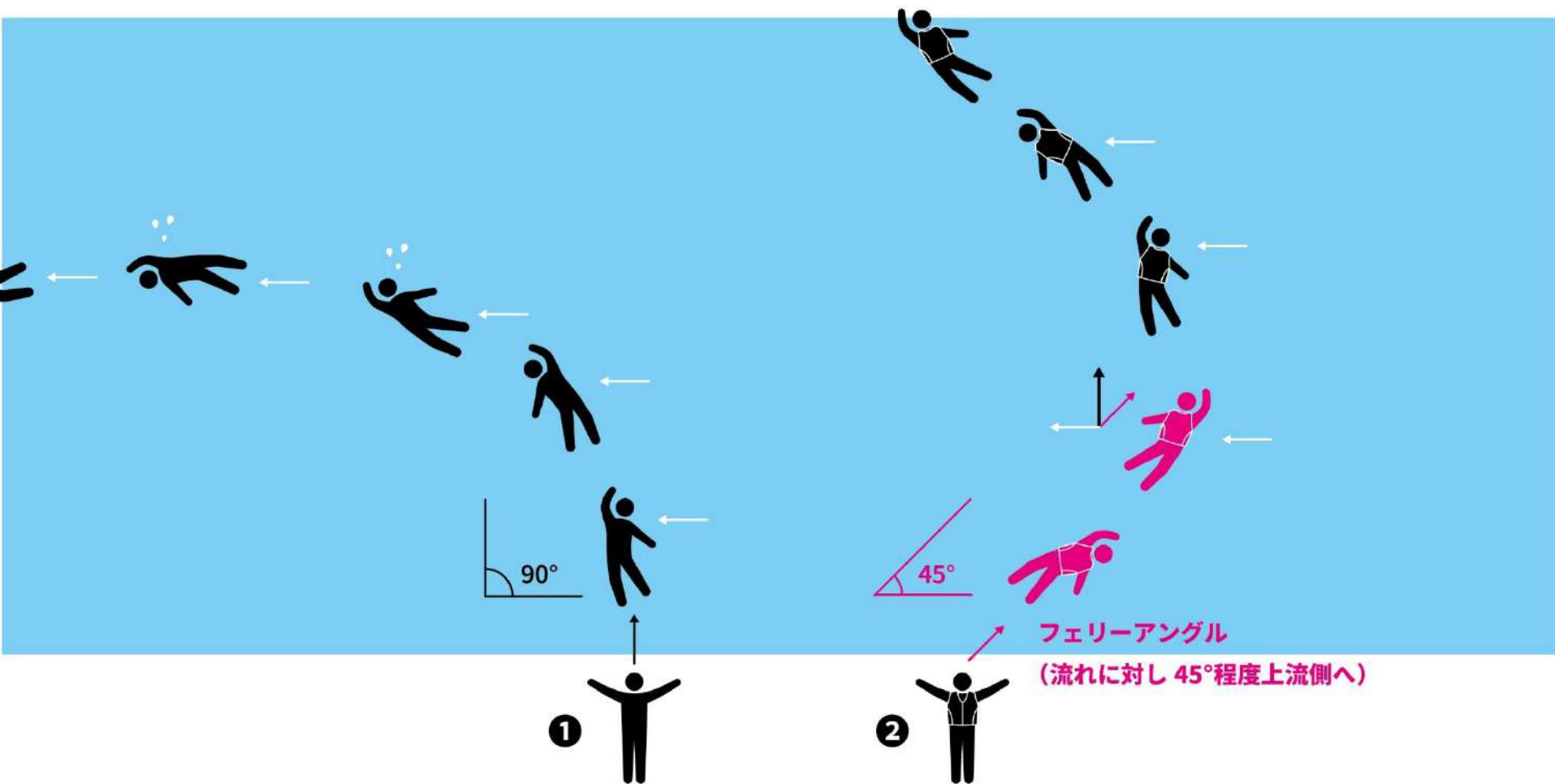
→できるだけ滑りにくい靴を履くことも重要

大人のひざ程度の浅さでも流速2mの場合、片足(成人男性)に約15kg(2ℓのペットボトル8本分と同等)の力が水平方向にかかる。
バランスを崩して転倒すると、水があたる面積が大きくなり、さらに大きな力が加わることになる。

流れに対し、 直角に泳ぐと 流されます

動水圧により、流れの強さは想像以上です。
対岸まで泳ごうとした際、流れに対し直角に泳ぐと簡単に流されることがあります。(①)

流れに対し上流側に斜め45°程度の角度をとることによって、自分の推進力と流れの力が合力となり、効率的に川を横断することができます。(②)
(泳ぐ際はライフジャケットを着用)



下向きに引っ張られる流れもあります

左図のように岸から岩などが突き出た場所等では、下流側のエディー（反転流）とよばれる水理現象があります。エディーそのものは穏やかな流れが周回していますが、圧力差の異なる本川の流れとぶつかる箇所（エディーライン）では下向きに引っ張られる流れが発生します。



循環流という、反転する強力な流れも生まれます

川を横断するように設置されている堰堤の直下流では、越流した流れが図のように上流側に反転する流れ（循環流＝リサーキュレーション）となり、ここに捕捉されると脱出が非常に困難になります。

堰堤の上流は流れが穏やか

空気を含んだ泡の多い水（ホワイトウォーター）の中では十分な浮力が得られません。高浮力のライフジャケットがなければ短時間で危機的な状況になる可能性があります。

この距離が長いほど
脱出困難

子どもが堰堤を渡ったり
飛び込みをすることがある

堰堤の直下流では上流方向に反転する強力な流れ（リサーキュレーション）が発生する

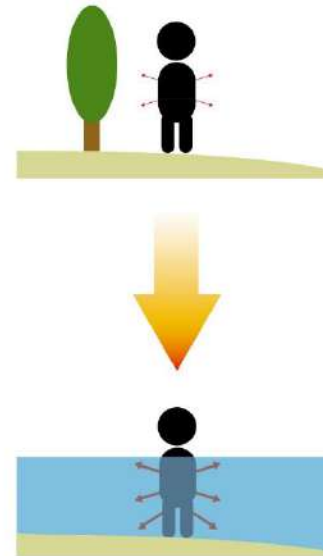
水の中は体温が奪われやすい

お風呂や温泉の温度は体温より高いため、体は温まります。川の水は体温に比べかなり低いのが一般的です。

熱伝導率 ($\text{W} \cdot \text{m}^{-1} \cdot \text{K}^{-1}$) を比較すると、水 (0.561) は空気 (0.0241) に対し20倍以上良いことから熱を奪われやすい性質を持ちます。

さらに流れの中では時間とともに急激に体温が奪われ、低体温症 (ハイポサーミア) を引き起こすことがあります。

活動時には水に濡れても乾きやすい服装や、ウェットスーツ等を着用するなど、体温低下をできるだけ予防することが重要です。



**水の熱伝導率は、
空気に比べ
20 倍以上**

低体温症 (ハイポサーミア)

- 体温 (直腸温度) が35度以下になること
- 軽度は、さむけ、ふるえ等が起こり、思うように体がうごかせなくなる。
- 重度になると、昏睡状態になる等命に関わる事態となる。



恒温動物である人間にとって、熱を奪われ続け、低体温症を悪化することは命に関わる事態を引き起こしてしまうことになります。

水辺に近づくにつれ リスクが高まります

3-5m 程度

川には水があり、流れています。

水の中は、陸上に比べ各段にリスクが高くなります。一見浅そうに見えても、川には急に深みがある場合もあります。

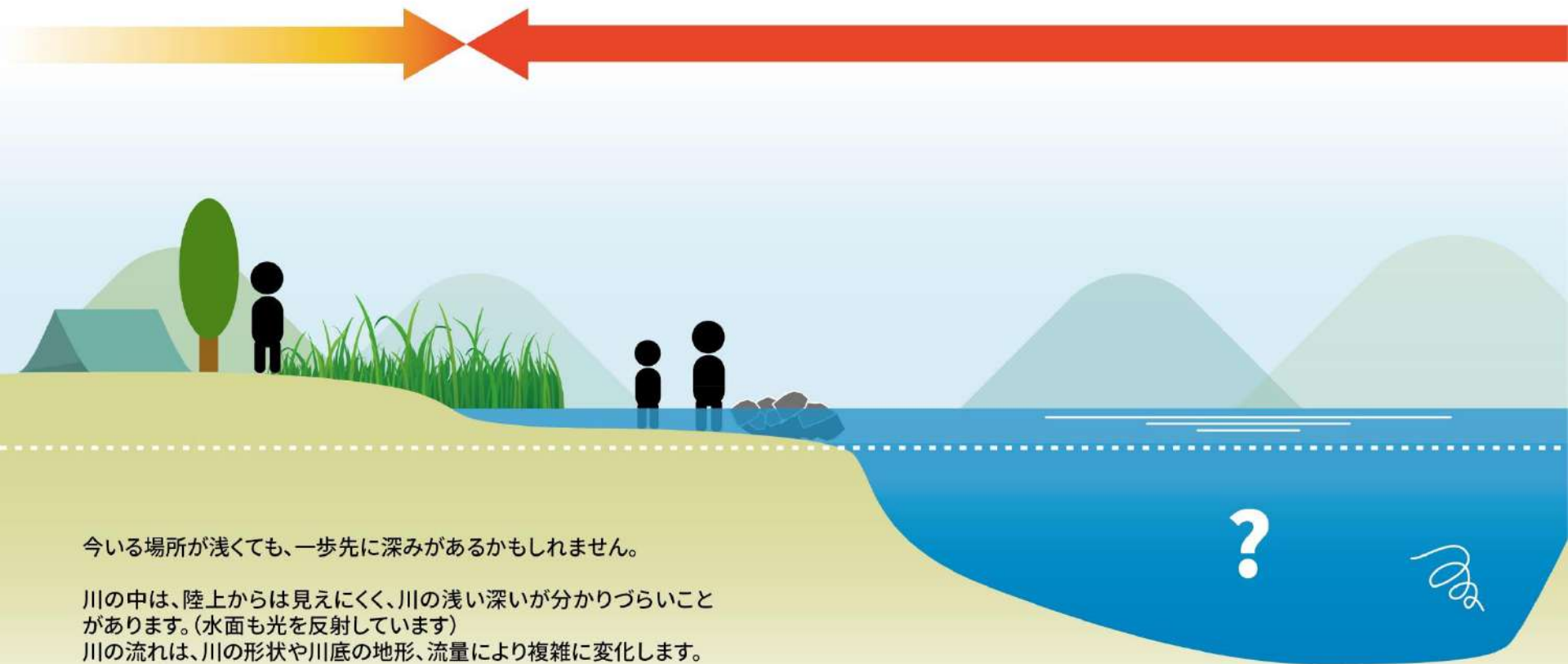
水際の護岸や浅瀬の石などのコケ、濡れた石やコンクリートなどとはとても滑りやすくなっています。
滑った後に本流に流されたり、深いところまで流されると、溺れることに直結します。

水際は、このような水中への転落、引き込まれなどの危険があるとともに、増水などで陸地と水面との境目が変化しやすいエリアです。

「陸地と水面との境目」より、3-5m程度陸地側に立ち入る可能性があるときは、ライフジャケットを着用することで落水等による危険度を大きく下げることができます。

(川の状態、柵の有無、水際までのアプローチのしやすさ、転倒しやすい足場などにもよります)

川の中は、 陸上からは見えにくい



今いる場所が浅くても、一歩先に深みがあるかもしれません。

川の中は、陸上からは見えにくく、川の浅い深いが分かりづらいことがあります。(水面も光を反射しています)

川の流れは、川の形状や川底の地形、流量により複雑に変化します。

特に屈曲部の外側は洗掘による深みが存在しています。この深みでは、水面は穏やかに見えますが、水中では川底に引き込むような目に見えない複雑な流れが存在します。

また、河川工作物付近にも局所的な洗掘等による深みが生じている場合があります。

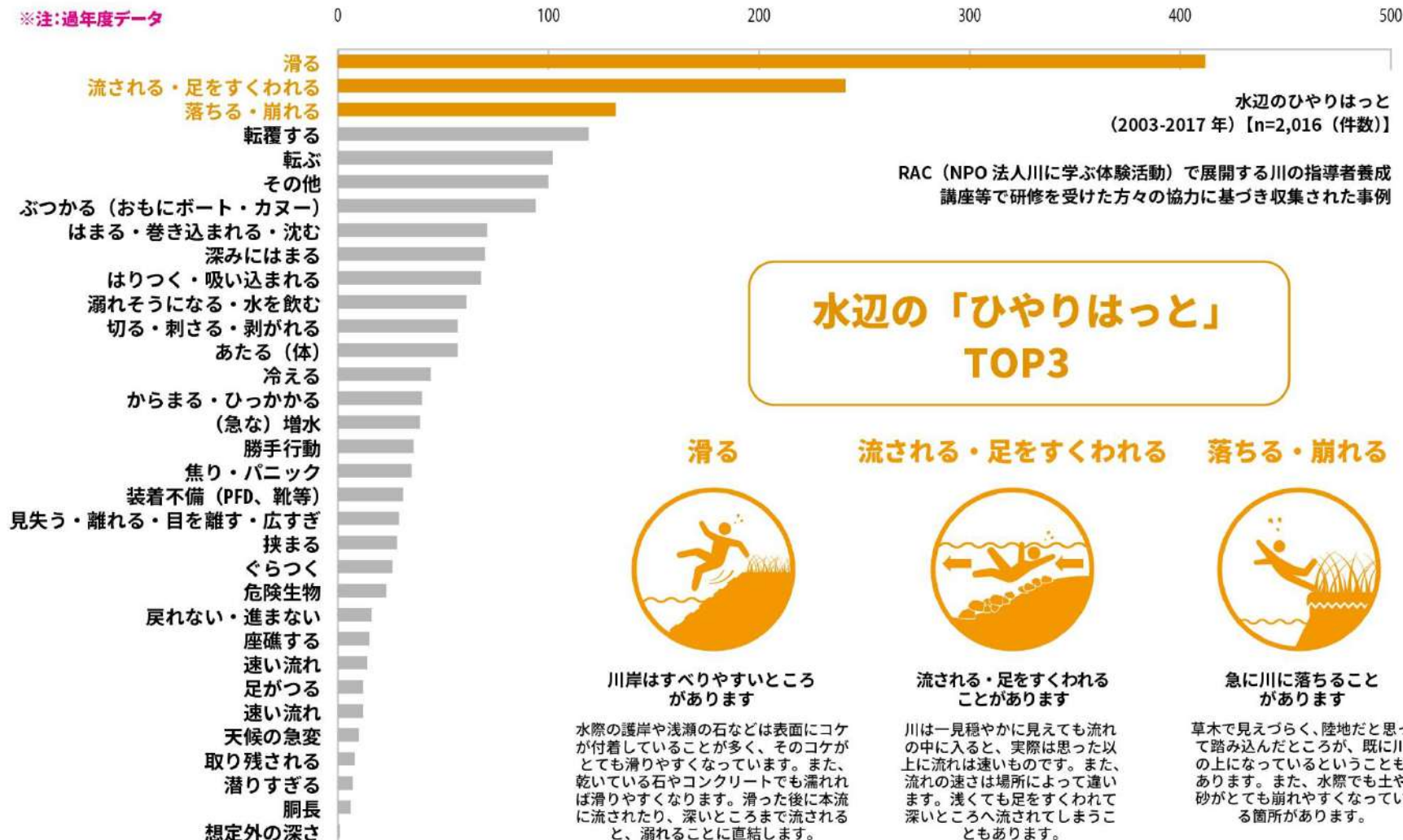
水辺の「ひやりはっと」 最上位は「滑る」

水辺のひやりはっと事例
(2007年-2017年度収集 2,016件)

※注:過年度データ

全国の川の体験活動の指導者が水辺で「ひやり」とした事例を収集・分類したところ、最も多い事例は「滑る」で、全事例の2割を占めていました。続いて「流される」、「落ちる」の行為による事例が「ひやりはっと」の上位3位を占めています。
このように、水辺に入る・近づく際には予期せぬ事態が起こりうるため、活動の際には装備を整え、活動する場所に存在する危険を予見することが重要です。

河川財団調査



今いる場所が晴れていても 急に増水することがある。

川では今いる場所で雨が降っていなくても、上流で雨が降っていたりダムの放流などの影響で、水嵩が急に増えることがあります。

増水すれば浅かった場所も、深くなってしまいます。さらには、流れの強さが増し、流されやすくなってしまいます。

川原の草が生えていないところは、増水時に水が流れていることの証



増水前の川



増水後の川

上流側に雨雲が見えたり、雷鳴が聞こえたりした時はもちろんのこと、普段流れてこないペットボトルや流木、落ち葉などが流れてきたり、水が冷たく感じたり、水位が急に低くなった時には迷わず川から離れましょう。

川原の草が生えていないところは、増水時に水が流れていることの証。堤防の上や、建物の建っている場所まで避難しましょう。

2008年の都賀川における水位上昇

10分間で+1.34m上昇



甲橋地点のモニタカメラ映像（兵庫県より）

川の事故は瞬間的に発生し、 すぐに致命的な状況になる

川の事故は瞬間的に発生します。

そして息ができなければ、約1分で致命的な状況になります。

また、消防隊が到着するまでにも数分が必要です。

一般的に水の中にいる人を救助するのは困難を極めます。

さらに、川では流れがあることから刻一刻と状況が変化します。

そのため、事故が起きないようにすることが
何よりも重要です。

浮いてさえいれば、救助の時間が稼げます。

リスクを認識し、個人個人で対処することで水難事故の多くは防ぐことができます。

ライフジャケットで 自分の命を自分で守る

流れる水から受ける力は、水の速さと水を受ける面積で変わります。
ひざ下程度の川でも、流速が増せば、大人でも簡単に流されます。

自分の命は、まず自分で守るしかありません。
他の人がライフジャケットを着ていなくても、自分で判断することが重要です。

ライフジャケット 着用の目安

以下によるリスクが1つでもある場合、
ライフジャケットを着れば溺水に対する危険度を
大きく下げることができます。
(川にもよります)

立ち入る可能性のある「すべての範囲」において

- ① 流れがある
- ② 深みがある
- ③ 増水する恐れがある

まわりから浮いても、
着て「浮く」べし！

ライフジャケットは、
たとえるなら
「川のシートベルト」だよ

膝下程度の水が、
急に増水することもあるよ



ライフジャケットは ホームセンター等や ネットでも買えます

ライフジャケットには大きく分けて、固定式と膨張式があります。膨張式は落水時に膨らむタイプのため、常時水に入る活動には固定式が向いています。

固定式のライフジャケットは、ホームセンターやアウトドアショップ等やインターネットでも購入することができます。ただし、中には浮力・構造・強度等の問題から川での活動には向いていないものもあります。

浮力や強度など、川遊び用として推奨できる「安全基準」に関する認証制度の認定を受けた製品を買うのも一つの目安となります。

川での活動に適した ライフジャケットの例

体の大きさに対し、
十分な浮力がある

ベルトを締め、
体にフィットさせることで
脱げにくい構造に
なっている。

股下ベルトがある
(子ども用)



認定制度の例



川育ライフジャケット 認定マーク

主な基準

- ①流れの中で脱げにくい構造である
- ②動きやすく、泳ぎやすい
- ③呼吸確保しやすい浮遊姿勢となる
- ④川の活動に必要な十分な強度がある

年齢や体の大きさ、 用途等に合わせた ものを選択

ライフジャケットは、年齢や体の大きさ、用途等に合わせたものを選ぶことが重要です。小さな子どもが大きなライフジャケットを着用しても、脱げてしまったり、ライフジャケットの浮力が身体に正しく伝達されない場合があります。

実際に着用して、ベルト等を締めるなど、ライフジャケットが身体に固定されるまでフィットさせることが重要です。

目安となる利用者年齢

大人～中学生程度

小学生程度

幼児



【ライフジャケットIII Lサイズ】

目安体重 80kgまで
目安胸囲 75～110cm
浮力 9.1kg

【ライフジャケットIII Mサイズ】

目安体重 65kgまで
目安胸囲 55～85cm
浮力 7.5kg

定価 4,200円＋税



【ライフジャケットキッズIII】

目安体重 15～40kg
目安胸囲 45～75cm
浮力 5.6kg

定価 4,200円＋税



【ライフジャケットインファントDXIII】

目安体重 15kg以下
目安胸囲 50cm以下
浮力 4.0kg

定価 3,700円＋税

理想的な装備

水面でも呼吸が
できるようにする。

ライフジャケット

もしもの場合に備え着用する。たとえ
浅い川でも、急に増水することがあり
ます。また、川に入らなくても足をす
べらせて転落することもあります。

足を守る。
脱げないようにする。

運動靴など

濡れてもよい運動靴や
スポーツサンダル（か
かとがしっかりと固定
できて脱げないようも
の）などでも OK。

その他

スローロープ （スローバッグ）

指導者は、万が一の時に備え、スローロープを携行しましょう。
バッグの中に水に浮く素材（ポリプロピレンなど）でできた直径
10mm 前後のロープが 15m ～ 20m 程収納されています。

水抜きのある



大切な頭を守る。

ヘルメット（あれば）

川では、「水抜きがある」など
専用に開発されたものを利用す
ることが大切。



化学繊維でできたシャツ。
濡れても乾きやすい。
綿は湿きにくく体温が奪われる。
その他、状況に応じウェットスーツ
またはドライスーツを着る。

体温を奪われない
ようにする。

乾きやすい 服装（水着など）



漂流する人を陸上や安定した
ボートの上から救助する道具。

もしも自分が流されたら

1

立たない

流れのある場所では、浅くて足がつきそうでも、立たずに浮くまたは泳ぐ。
(「フットエントラップメント」等の瞬時に危険となる事象を避けるため)

2

元いた場所に戻らない

自分が流された場合、元いた場所に無理に戻ろうとしない。
(戻ろうとすると流れに逆らうことになり、リスクが増す)

3

流れの緩やかな場所へ

(膝からつま先を水面に出すなどの漂流姿勢を保って)
下流側を目視し、流れの緩やかな場所を見つけて避難する。



足を下流に向けた漂流姿勢
(ホワイウォーターフローティングポジション)

自分以外の人が流されたら

川で流されたら、流れの強さにより、あっという間に遠くまで運ばれてしまいます。

(流された人を助けようと) クーラーボックスやペットボトル等の浮くものを探している間に、漂流者は遠くまで流れてしまいます。

また、それら浮くものを遠くまで飛ばし、流れの中で漂流者にピンポイントで届けることは至難の業です。

そうならないように、万が一の時に備えスローロープを携行し、瞬時に投げられるようにしましょう。



スローロープ
(水に浮くロープ)

※水に浮かないタイプのロープは水中でスタック(引っかかる)するなど危険な状況を生む

救助するときは、自分自身の安全を確保し、漂流者に声を掛け、助ける側の存在が認識されてから、ロープに入ったバッグ側を、漂流者の体の上に投げ、漂流者を岸やボートまで引き寄せます。



救助される人(ライフジャケットを着用)は、仰向けの状態でロープが飛んでくるのを待ちます。
ロープをつかんだら、飛んできた方向と反対側の肩にかけます。
(流れに対し上流側45°程度の「フェリーアングル」となり、効率的に救助されやすくなります)

ロープの扱い等使用方法は事前に確認が必要です(引き込まれることがあるので、救助者はロープを腕や体に巻いてはいけません)

情報を得る

☐ 気象情報

雨や雷などの情報
数時間までの予測情報もある

インターネット等で、狭い地域の天気予報をリアルタイムで手軽に入手できます。これらの情報を活用し、活動する川での天候の変化等を予測できるよう心がけましょう。

今いる場所が晴れていても、上流で雨が降れば、やがてその水は下流にやってきて水が増えることになります。

突然の雷雨など、急な気象変化もあります。活動中にも気象情報を随時チェックし、悪天候の場合は、中止又は予定を変更する勇気を持ちましょう。

上流の天気も
チェック



☐ 場所情報

下記の情報とあわせ、活動場所にある看板や地元情報をよくチェック。

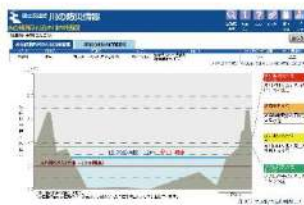
①水位情報

国土交通省では地域の雨量情報、河川の水位情報やダムの放流情報等を「川の防災情報」で提供しています。携帯電話でもリアルタイムで利用できます。

下見で現地の川を見たときには、その時の水位を「川の防災情報」でチェックしましょう。当日現地に行く前に、川の状態を調べるなどに役立ちます。

水量が多くなれば、流れも強くなります。

活動中も水位が上がっていないかどうかよくチェック。



川の防災情報
全国のリアルタイム雨量・水位等の情報を提供しています。



②過去の水難事故発生箇所

水難事故の発生箇所や発生状況等がWEBの地図上に表示されています。
(子どもの水辺サポートセンターのホームページで公表)

事故が多発している箇所は地形や川の構造、利用状況等に特徴のある場所といえます。
(過去に事故がない場所は安全、というわけではありません)

活動予定の河川等における事故事例から学び、安全対策に活用して下さい。



全国の水難事故マップ
2003年以降の全国の河川で発生した水難事故の内、報道等で把握できた事故の発生箇所と発生状況等を地図上に表示。



知識を得る

□ 更に詳しく

川で活動を行う際に気を付ける事などについて、冊子や映像をはじめとした様々なツールや講習会等で紹介がされています。

①冊子



水辺の安全ハンドブック 等

水辺で活動する際のポイントや
や川遊びの魅力等を紹介

www.kasen.or.jp/mizube/

②映像



安全な川遊びのために 等

川での注意点等を映像で紹介
「子ども向け」(第1部)と「大人向け」
(第2部) がある

③講習会等

NPO 法人 川に学ぶ体験活動協議会 認定指導者資格・講座 等
水難救助の国際資格「レスキュー 3」講座 等

www.rac.gr.jp

www.srs-j.co.jp

まとめの チェックポイント

基本事項チェックポイント

- ☒ 必要な装備（ライフジャケット等）を用意しましたか
- ☒ 気象情報を入手しましたか
- ☒ 活動場所の特徴等の情報を入手しましたか



【団体・学校の場合】 上記に加えて以下の例もチェック

- ☐ 実施計画書を作成しましたか（下見事項・プログラム概要・役割分担・中止基準・緊急用連絡網等を全て記載）
- ☐ 活動人数に見合った指導者（川での安全に関する有資格者等）がいますか
- ☐ 保険に加入しましたか



天候や川の水位・流れは常に変化します。
川の特性やリスクを理解し、
常に " もしも " を予測して自分の身を守りましょう

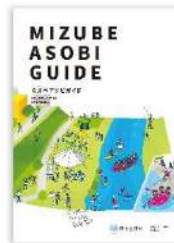
水難事故防止「ライジャケ・オン」
(ライフジャケット着用キャンペーン)
キャラクター 山田るま さん

NPO 法人川に学ぶ体験活動協議会 認定 RAC リーダー
水難救助の国際資格「レスキュー3」SFR 資格取得

水難事故防止
ライジャケ・オン!

川には魅力と 遊び方・学び方 がたくさん

詳しくは、「ミズベアソビガイド
(国土交通省 河川環境課発行)」にて

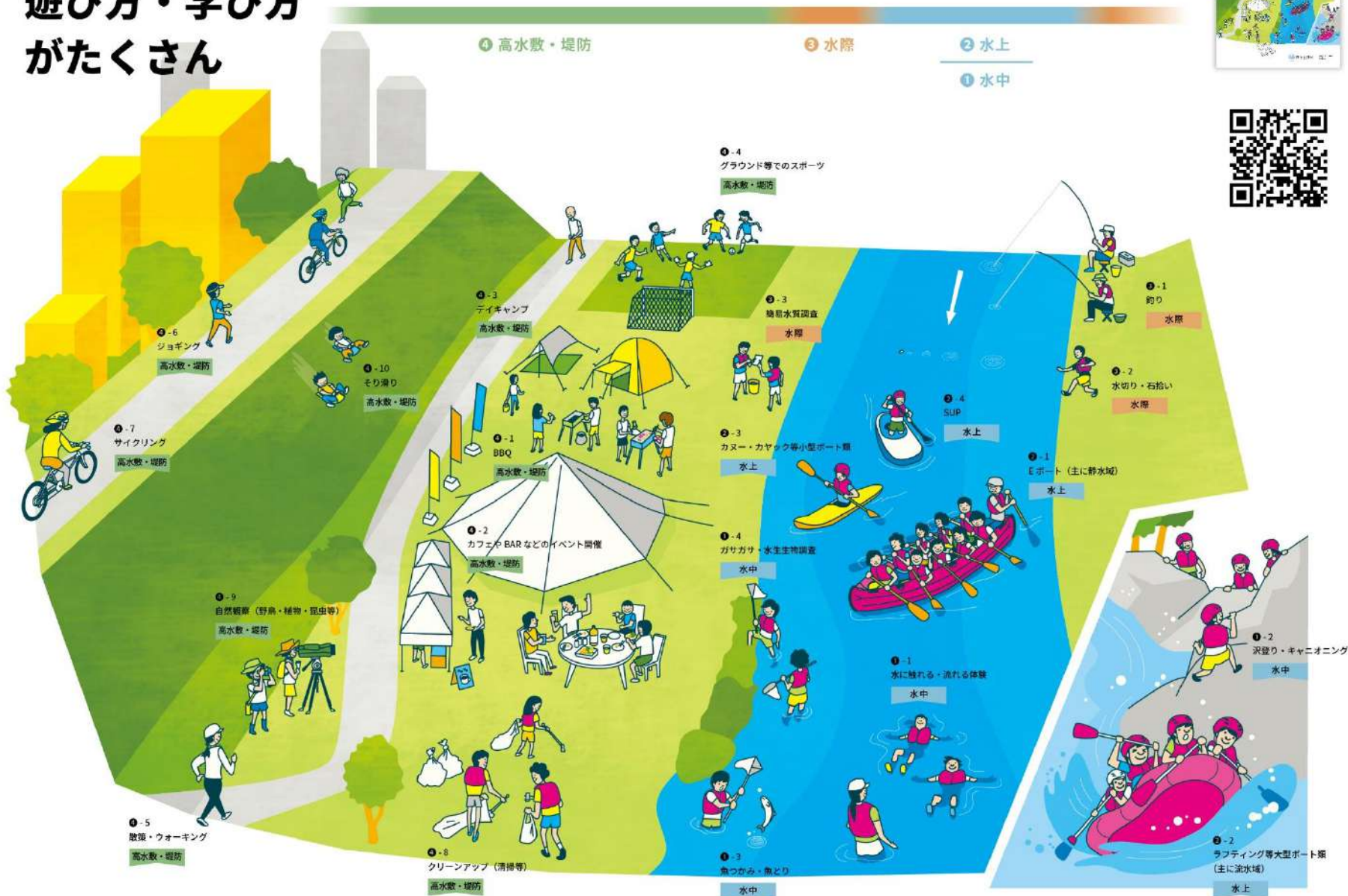


④ 高水敷・堤防

⑤ 水際

⑥ 水上

⑦ 水中





川との触れ合いから学ぶ

川と触れ合うことで、多くの事を学ぶことができます。
決して意のままにならない川の自然や生物と向き合うことで、
子どもたちの感性が磨かれ、創造力が養われるのです。
川は自由使用をすることができますが、その分個人個人が自分の身を自分で守ることが求められます。
恵み多い川の活動を行うためには、川にひそむ様々な危険を知り、
事前の準備と安全管理をすることが重要です。

川での自然体験では、地域の河川の特性に合わせた学びの提供や安全管理を行うスキル・ノウハウをもった指導者が欠かせません。河川財団はNPO 法人「川に学ぶ体験活動協議会」との連携により「川の体験活動」の指導方法、指導者育成方法等の研究を行っています。

河川財団はそれらの指導者の拡大、河川教育等に関する資格制度の活用を促進、各種の情報提供や体験活動のサポートを行い、一般市民、教育関係者、行政職員等へ河川教育の展開を図ることにより、河川の保全や、国民の生活環境の向上に努めています。



公益財団法人
河川財団